
幽霊紳士狂想曲

杏野丞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊紳士狂想曲

【Nコード】

N3955B

【作者名】

杏野丞

【あらすじ】

ああ、神様仏様なぜですか。幽霊に言い寄られてもあたし、全然嬉しくないんですけど！——靈感少女・マリイこと倉田茉莉と、彼女を愛してやまない美貌の英国（幽霊）紳士・エドワードのボケボケラブコメディ。

第1楽章：幽霊紳士エドワードと靈感少女マリイ

なんて言うか。もういい加減にして欲しい。

毎朝毎晩、繰り返されるこの恒例行事をコイツは何故飽きもせず
に続けられるのか。あたしが拒絶してるのを知ってる癖に。

「おはようマリイ！ 爽やかな朝だよ」

——ああ、来やがった。

女らしさなどミリグラム単位も残っていない諦めの言葉が脳裏に
浮かぶ。

薄く開いた瞼の隙間から覗く見慣れてしまった顔に、あたしはガ
ツカリして顔を背けた。整いに整った白皙の美貌も天井が透けて見
えるモーニングスーツ姿も、間違いない幽霊のモノ。なのにコイツ
はあたしよりイキイキした顔をしている。

それがどれだけ腹立つ事なのか、この男は全く気付きもしない。

「マリイ、君の瞳は今日も白百合の花弁に落ちた朝露の雫の様に清
らかだね」

——清らか？

寝惚けまなこな上に、ストレスでドライアイのこの目が、清らか？

頭に浮かぶのは皮肉ばかりだ。朝っぱらからこの英国紳士はあた
しの精神に負荷をかけまくる。と言うか貴方のせいでドライアイな
んですが、あたしは。

「マリイ、僕の愛する朝露の君。そんな美しい君から僕への朝の挨拶は頂けないのかい？」

……ああもうウンザリすんだよその齒が浮くセリフと修飾語の多さが！

だけどそんな事を言う気力は二ヶ月前に尽きている。だから私は力なく彼へ挨拶を述べるのだ。

——めちゃくちゃ不本意だけど。

「おはようエドワード。そしてあたしはマリイじゃ無くて茉莉^{まり}です。倉田茉莉です」

愛想も何もあつたもんじゃない御挨拶。

でも彼はめげない。金髪碧眼の英国人貴族、エドワード「レイン」クロムウェルはそんな事でめげる人間、もとい、幽霊じゃない。

「ふふ、全くつれない娘だねマリイ。でもそんな秋風の様に涼やかな君の態度も嫌いじゃないよ」

「人の話聞けよ」

ツツコミを完全に無視して、英国（幽霊）紳士エドワードは、ここぞとばかりに満面の微笑みをその美貌に浮かべた。

残念だったな、そんな物にときめいたりはしない。あたしは自他共に認めるB専だ。

「エドワード、もう朝の挨拶は済みました。着替えするから出てって」

「了解。レディの御命令には従うよ」

冷たく抑揚のないあたしの言葉に素直にお辞儀をすると、エドワードは部屋のドアをすり抜けて向こう側に消えた。

「……………」

ああ、無性にグツタリした気分になる。

エドワードがあたしの家に住み着いてから、心に来た一軒家サイズの胸のつかえが取れない。

——いやそのサイズじゃつかえどころか心が潰れるか。

「……はあ」

朝っぱらからため息なんて、女子高生なのになんてババ臭い。でも殆んど毎日毎朝毎晩、あたしはため息を吐きまくる。ため息が幸せを逃がすなんて言ったのは誰なんだろう。あれは大きな間違いだと思う。幸せを逃がした人間がため息を吐くのだ。

だらだらと寝間着のシャツのボタンを外しながら何気無く鏡を見る。と。

「……………!?!」

壁から生えた生首がこちらを見ていた。新手の妖怪じみた格好になっていたのは英国（幽霊ストーカー）紳士エドワード。無駄に顔が整っているせいで、そのギロチン状態が本気で怖い。というか、キモい。

「……エドワード、覗きか。覗き魔か、このヘンタイ」

「嫌だなあ変態だなんて！僕はただサナギの皮を脱ぎ捨てて、蝶へと開化する君を見届けよう」と

バシッ。

全部聞く前にあたしは英国（幽霊ストーカー覗き魔）紳士エドワードに『御清めの塩』を投げつける。幽霊は見事に霧散した。

神様仏様、お願いします。断食でもお遍路でも何でもするから、本当にお願ひします。コイツを早く成仏させて下さい。それが無理ならあたしの無駄に強い靈感を早く消して下さい。

ああ、なんて言うか。もういい加減にして欲しい。

第1楽章：幽霊紳士エドワードと靈感少女マリイ（後書き）

●登場人物紹介●

・倉田茉莉くらたまり

通称：マリイ

靈感少女。ハーフでも何でもない普通の日本人。ひよんな事から幽霊、エドワードと知り合う。そのため毎日付きまとわれる羽目になり、若干ストレス溜まり気味な女の子。現在高校に在学中。

・エドワード＝レーン＝クロムウェル

通称：エドワード

幽霊紳士。元はイングランドの公爵家の御曹司だが、百年程前に若くして死去。その後、成仏するでもなく各国を徘徊した後、日本へ到達。現在愛しいマリイを住み込みでストーキング中。

第2楽章：蜂と蜜、人と愛

「マリイ、『蜜は蜂の誇り、愛は人間の魂の誉れ』と言う言葉を知っているかい？」

「あたしはマリイじゃない茉莉です。……それ、どこのことわざ？聞いた事ないけど」

不意に話し掛けてくるのはエドワードの癖だ。まあ、こっちが覚えて無視してるのに話し掛けて来る幽霊なんて沢山いる。

でも彼が不意に言うのはいつも『ことわざ』だ。他の幽霊みたいに身の上話や、誰かへの恨みを言うでもなくて。彼がするのは、ただの軽いおしゃべり。

だからあたしはエドワードの言葉の全てを無視する訳じゃない。いろんな国を渡り歩いて来た彼の話は、案外楽しいから。

——まあ、あの訳の分からん寒いお世辞は全て無視するけども。

「フィンランドの諺さ。素敵な言葉だよ……。慎重しく働く蜂がその仕事の結晶たる『蜜』を誇りに思うように、人間も何かを慈しむ心から生み出す結晶——『愛』を誉れとするんだ」

ほう、さすがは貴族様。よく物を知ってらっしゃる。

教養に満ちた幽霊紳士は穏やかな微笑みを浮かべながら空中に腰掛けている。どこで用意したのか純英国式のアフタヌーン・ティーをたしなみながら。

だけど今はそんな事はどうだっていい。

「ねえエドワード」

「なんだいマリイ？」

「その話をしたのは、あたしがこの蜂をあの世行きにさせようとしてるから？」

殺虫剤を標的——スズメバチに向け構える。気分はゴル●13だ。ターゲット・ロックオン。

「ああマリイ！ レディーがそんな物騒な言葉を使うなんて。美しい薔薇色の唇に、はしたない言葉なんて似合わないよ。君の唇を彩るのは愛の囁きだけでいい」

ウインク飛ばすな気持ち悪い鳥肌立つわ寒過ぎんだよこのキザなボンボン貴族が。

自分でも驚くぐらいスラスラ出てくる罵倒語の数々。あたしが今考えた事を全部口にしたら、エドワードは恐らくショック死するだろう。

あ、もう死んでた。

「……エドワード、動かないで。飛んだら上手く殺虫剤かけられない……あ」

「や、止めてくれマリイ！ 君が動くと蜂がこっちに……うわあ！？」

——ビビってる。幽霊だから触れられる筈もないのに、本気でビビってる。

紳士の教養なんか欠片もないへっぴり腰にあたしは少々啞然とした。キレイな顔と服装をしているだけに、マジでかつこ悪い。

どうやらエドワードは幽霊専用ティーセットは出しても幽霊専用殺虫剤は出せない様だ。まあ英国紳士がそんなもん出してきたら、

優雅もクソもないから嫌だけど。

「エドワードどいて。早く始末つけないとまた飛んでっちゃう」

「よしたまえマリイ！ 愛しい者がこれ以上怯える様を見たいのかい！？」

「でもほつといたら刺されるかも知れないし。あたしだって怖いんだから」

「！」

「逃がしたいけど追い払えないし、外に出て誰かを刺しても困るし……この蜂には悪いけど、今日が人生最後の日だと思ってもらって」
「まっままま待つんだマリイー！！」

裏返った声で、急にエドワードが叫んだ。見たこともない必死の形相。

過去に蜂関係で何かあったんだろうか。コイツはよっぽど蜂が苦手らしい。

「君の目の付かない所にこの蜂が行けばいいんだろう？ だったら僕が追い払うから、殺さないでやってくれたまえ」

蜂が苦手そうなのに、本当に必死だ。そこまでしてこの幽霊紳士はこのスズメバチにあつちの世界の住人になって欲しくないらしい。昔蜂の幽霊にカツアゲでもされたんだろうか。

——そんな冗談はさておき、元々この蜂に恨みがあつた訳でもなかったから、あたしはこくりと頷いた。

「じゃあマリイ、その窓を開けて。僕が蜂を誘導するから、絶対にこちら側に来ちゃいけないよ」
「わかった」

あたしが窓から離れた事を確認すると、エドワードは真剣な表情で蜂に向き直った。今の顔ならきつと映画にマフィア役で出られるだろう。

慎重に、本当に慎重にエドワードは蜂との距離を縮めて行く。ゆっくりと、ゆっくりと。

……ここで、予想外な事が起こった。

「ただいまー。アラ茉莉なんで壁に張り付いて……あら、スズメバチ？」

買い物袋を四つも抱えて入ってきたのは、お母さんだった。壁にもたれていたあたしをビビって蜂に近寄れないと勘違いしたのだろう。お母さんの口元にゴッドファーザー並みの凶悪な笑みが浮かぶ。

——あ、まずい。

「大丈夫よ茉莉、お母さんが退治してあげる！」

弁解の隙さえ与えず、お母さんはあたしの手から殺虫剤をひったくった。エドワードの方から小さく息を飲む音が聞こえた気がしたのは、多分気のせいじゃない。

だけど気付かないと言う事は時として非情な結果を生む。真っ青なエドワードの顔なんか見えない鈍感なお母さんは、真っ直ぐに、蜂に殺虫剤を噴射した。

「うアアああああああ！！」

真昼ののどかな集合住宅に、エドワードの間抜けな絶叫がこだまする。その耳が痛くなる程の響きが消えた時、蜂はピクリとも動か

ない状態になっていた。ついでに、エドワードもいなくなっていた。

「これで一件落着ね！」

まるで水戸黄門のようなセリフをさらっと口にして、お母さんは高らかに笑った。母は強しとは本当だ。殺虫剤を片手に仁王立ちするお母さんを見ながらあたしはそう思った。

——それからエドワードは一週間ほど行方不明になったが、何度聞いてもその理由は絶対に教えてくれない。

第3楽章：懲りない幽霊紳士

「ねえエドワード」

「何だいマリイ？」

「貴方どうしてあたしを口説き続けるの？ あたし、それに応えた事なんて一度も無いのに」

「マリイ、たとえ君が僕の思いに応えてくれなくても構わないんだ」
「え？」

「愛は、見返りを求める物じゃ無いからね」

「……」

「僕はね、マリイ。死してなお幽霊として長い年月をさ迷い、この島国まで辿り着いた。それはきつと、君がここにいたからだと思ってるんだよ」

「エドワード……」

「君を探し求めていたから、僕は天に召される事は無かった。命も時も越えて、僕は君を愛していたんだ。マリイ、それくらい僕は君を愛してる。だからいいんだ、君がその思いに応えてくれる日が来るまで僕はいつまでも待つよ」

「ああエドワード……！ あたし、やっぱり貴方を愛し」

バシッ。

——命中、御清めの塩。

「……エドワード、いい加減その人形を使ったくっさい独り芝居を止めなさい」

「……マリイ……」

「マリイじゃない茉莉です。止めないとまた御清めの塩で被っぞ」

「ふっ……了解したよ、僕の可愛い子猫ちゃ」

バシっ！

——命中、御清めの塩第二段。

ああ、マリイ。僕の愛しい椿姫。君の冷徹なツツコミに心をえぐられようと、僕は決して諦めたりしない。

やっぱり僕が愛してるのは、そんなつれない君なんだから。

彼がそう思っていたとして、果たしてその思いが通じるのはいつなのか。それでも今日も幽霊紳士エドワードは、めげずに愛するマリイをストーリーキングし続けている。

第4楽章：スパイシー・ラヴァー

「マリイ、ちょっと君に聞きたい事があるんだけど」

「何エドワード？ 下着の色なら教えないから」

「……マリイ、僕はそんなヒワイで低俗な事を考えたたりはしないし、君に聞いたりもしないよ」

「嘘つけ、ちよっと考えたろ。ソワソワしてるぞ」

「……」

冗談よ。だからそんな、あからさまにギクツとしないで欲しい。

『死んでも心は英国紳士』じゃなかったのかエドワード。

そういえば、前に人の着替えを『サナギから蝶へと開化する君を見届けよう』と何か何とか言っただけなのはこの変態幽霊だったわけ。冷静に考えてみると、あたしは家の中に痴漢を飼っている様だ。もうちよっと身の危険を感じた方がいいだろうか。

「こほん。まあそんな話は置いておくとして」

「無理矢理か」

「……マリイ、いい加減話が進まないだろう。だから僕は君に聞きたい事があるんだ」

「じゃあ何？ 聞きたい事って」

「もしかしたら生粋の日本人たる君も知らないかも知れないのだけど……」

「だから何？」

エドワードが懷中から小さな容器を取り出した。かつちりしたモーニングスーツに身を包み、整った顔立ちを誇る彼には全く不釣り合いな物を。

——手の平サイズの豆ひょうたん。

「……エドワード」

「何だいマリイ」

「これって……」

「シチミトウガラシだよ」

……コイツの思考が全く読めない。

ここでどうして七味唐辛子が出て来るのだ。意味が全く分からない。

「……なんで七味唐辛子」

「いや、先日君の母君が『イチミトウガラシ』の代わりにこれを買っていらしてね。気になったのでちょっと拝借したんだが」

エドワード、貴方が勝手に物を持ち運ぶと靈感がない人にはポルターガイストにしか見えないんだけど。こないだお母さんが騒いだ原因はコレだったのか。

人の親の寿命縮めて楽しいかこのやろう。

「そこでふと気付いたんだ。『シチミ』と言うからには七種類の香辛料が入っているはずだ。その七種類を君は知っているかい、マリイ？」

「七味の種類……考えた事もなかった」

「そうか、残念だ。博識な君も知らないのだね」

と言うか、社会一般でまともに働いている人間はそんな事考えないし、知ろうともしない。絶対にこの貴族はどうかヘンだ。

「でもエドワード、なんで七味唐辛子の材料なんか知りたいの？」

「いや、材料が分かれば作れるだろうかと思つてね」

「七味唐辛子を？」

「そうさ。マリイ、君は辛党だろう？ 御家族の中でも特に。だから『シチミ』をプレゼントしようと思つてね」

おや？ 変態幽霊公爵エドワードには中々面白いプレゼントを考えてるらしい。以前プレゼントされた『丸一日マリイに愛を語る』の類の物なら即断ったけど、それならいいかも知れない。でも材料をどこで仕入れる気なんだろうか。

「しかし材料が分からないのなら仕方ないね。僕のオリジナルで『シチミ』を作るよ」

「ちよつと待てエドワード」

「何だい？ 僕のマリイ」

「貴方のじゃありません。……いやそうじゃなくて、オリジナルつて何入れる気だ」

「そうだね。シナモンとか、バニラビーンズとか、セサミとか……」

「全部甘い方の香辛料じゃないそれ」

「言つたじゃないか、僕のオリジナルだよ？ 世界で唯一マリイのための『甘露・甘い愛の七味』を作るのさ！」

「……あたし辛党つて言つたよね？」

冷たいツツコミも楽しそうに七味の材料を考えているエドワードには届いていない。

失敗しろ。頼むから失敗しろ。

——あたしの願いも虚しく、数日後エドワードは得体の知れない香辛料を持って颯爽と現れた。神様は、多分あたしが嫌いなんだろうと本気で思つた事は、あたししか知らない。

第5楽章：靈感少女マリイの憂鬱

AM07:00

「おはようマリイ！ 素敵な朝だよ！」

「……はあ」

「おや、どうしたんだいマリイ？ 朝からため息なんて吐いて」

「おはようエドワード。そしてあたしはマリイじゃなくて茉莉です

……ああ、ため息の原因ね。夢見たの。大した夢じゃ無いから平気」

「でもため息を吐く程度には大した夢なんだろう？ 僕でよければ話を聞くとよ」

「……エドワード」

「愛する君の苦しみは僕の苦しみ。マリイ、君が悪夢にうなされ震えるならば、一晩中抱き締めていてあげるよ。さあ、心に溜めこまず打ち明けてごらん？ 僕の腕の中で！」

「……」

「なんでそんなに迷惑そうな顔をしてるんだい、マリイ」

「……」

「ああ無言で立ち去ったりしないで！」

「しばらくそのくっさい態度を取らないと誓うなら話します」

「あ、ああ誓うよ」

「本当に？」

「本当だとも！ だからさあ、話してごらんよ」

「……」

「……」

「……」

「……ねえマリイ、いい加減話してくれないかな」

「………忘れた」

「なんだって？」

「さっきまで覚えてたのに、なんか貴方のくっさいセリフ聞いてたら忘れた」

「それは嫌味なのかいマリィ……」

まさか幽霊公爵エドワードの夢を見ていた、だなんて、本人には言えない。絶対に喜んで運命だ何だといい始めるに決まってる。

不満を漏らし続けるエドワードを無視しながらまたひとつ盛大なため息を吐く。あたしとエドワードの変わり栄えのない一日が始まった。

第6楽章：倉田家家族日記（弟編）

●月●日（水）

くらた じょう

ボクとボクのお姉ちゃんは、ユウレイが見えます。ボクは少し見えるけど、お姉ちゃんはいっぱい見えるみたいです。でも、お父さんとお母さんは見えません。

さいきん、ボクのお家に新しい人が来ました。エドワードこうしやくというユウレイの人です。

お兄さんのユウレイで、海ぞくのえいが出てた人にてて、かつこいいです。金ぱつです。いつもへんなスーツを着ているけど、海ぞくのかつこをしたらにていると思います。

エドワードこうしやくはユウレイだけど、こわくないです。夜トイレに行くときに明かりをつけてくれます。本のよめない字もよんでくれます。ばっきんがむきゆうでん、をこの前おしえてもらいました。

それにエドワードこうしやくがお家にきてから、お家にこわいユウレイがなくなりました。だから、エドワードこうしやくはいいユウレイです。

でもお姉ちゃんはあまりエドワードこうしやくが好きじゃありません。エドワードこうしやくはいいユウレイの人だから、なかよくしてほしいです。

こんどお父さんとお母さんとお姉ちゃんとボクでキャンプに行くときは、エドワードこうしやくもいつしよに行きたいです。

でも、お姉ちゃんがおこるから、こっそりつれて行ってあげよう
と思います。

+ + + + +

「……ま……す……まる、っと。よし、終わり！」

「^{じょう}丈、何書いてるの？」

「！！」

「それ日記？」

「お姉ちゃんは見ちゃダメ！ ぜったい見ちゃダメ！！」

「？ ……なんなの？」

この日、弟の日記を見なかった事を、後々あたしは激しく後悔する
事になる。だがそれはまた別の話。

第7楽章：アウトドアの神髄は山にあり

夏の暑さをしのぐには、やはり避暑地に赴くのが一番だ。特に夏の山は格別だとあたしは思う。

まあ、夏になると人間も動物も植物も、さらには幽霊も妖怪も妙に活気づいてくるからヘタに霊所には近付け無くなるけど。でもこれは霊感があるから仕方ない事だと、ずっと前から諦めている。山もそんな妖しいモノがない訳じゃない。でも高地特有の涼やかな空気や、かわいい動物達、見慣れない草花がそんな事も忘れさせてくれる。

夏にお出掛けするのはいい気分転換になるのだ。と言うか、本来あたしはアウトドア派だ。

「おねえちゃあーん！ 火つけるの手伝ってー！」

「ちよつと待っててー！」

ちなみにあたしの弟、靈感少年・倉田丈もかなりのアウトドア派だ。幽霊が見えるにも関わらず、危ない目にも一度も会わずに、そこらへんの子供より元気にすくすく育ったあたし達。『幽霊が怖くてキャンプに行けるか』が我等姉弟の夏休みのモットーだった。

「早くー！ ごはん炊けないよー」

——だった。そう、過去形。

「ほらマリイ、ジョーが君を呼んでるじゃないか？ 早く手伝いに行かなければ」

「……エドワード、言われなくても分かってます」

ああ神様、何故ですか？

何故、我が家に巢食っている幽霊公爵エドワードまでもがここに
いるのでしょうか。あたしはここへ家族水いらずでキャンプしに来
た筈です。あくまで『家族で』来た筈なんです。

「しかし中々いい物だね、夏場にこうして爽やかな森に訪れるとい
うのも。君の絹の様な白い肌も夏の日射しに一際輝きを増している
よ、マリイ！」

「ラメ入り日焼け止め効果だよ。白いからじゃありません」

土地が変わってもそのセリフの寒さは変わらないのか、このスト
ーカー。害虫並のしつこさと英国紳士の品のよさがどうして共存出
来るのか、不思議でならない。

「……それよりエドワード」

「なんだいマリイ？」

「なんで家にいる筈の貴方がここにいるの」

「ああ、君にはまだ話して無かったね。なんと、君の弟君がこのキ
ヤンプに僕を招待してくれたのだよ！」

——目の前が暗くなるとはこんな事を言うんだろうか。あたしは
思わずがつくりとうなだれた。

「……丈か。そう、丈なのか……」

「ジョーは天使の様に優しい子だね、マリイ」

予想外だ。激しく予想外だ。どうしてこんな怪しげな幽霊に気を
許したんだ、弟よ。

ああ神様仏様、まさかの敵の出現にあたしは心が砕けそうです。

「ほら、もう水汲みは終わったんだろう？　早く火を起こすの手伝ってあげたまえ。僕も手を貸すよ」

「手なんて貸さなくてもいいです。テントの上にも座ってて」

「もう、強がりだね。僕の手が必要な時はいつでも呼ぶんだよ、マリイ？」

誰が呼ぶもんか。エドワードが火を起こすのを一般人が見たら、それはもう完全な自然発火にしか見えない。と言うより怪奇現象だ。変な噂立ててこのキャンプ場を閉鎖させて堪るか。

「あ、おねえちゃん！　やっと来た」

「ゴメンね。やっぱり火点かない？」

「うーん……さっきから何回もつけてるんだけどね、ダメみたい。まきが湿ってるのかなあ」

「そうみたいだね……どうしようか。また新しい薪拾って来る？」

「その必要には及ばないよ諸君！」

——今、一番聞きたくない声が聞こえた気がする。気で済んだらどんなにいいか。

「あ！　エドワードこうしゃく！」

「……エドワード……」

テントの上にも座ってる筈の幽霊公爵エドワードが、地上三メートル位の所に逆さまに浮いていた。

今更だけどキャンプ場にモーニングスーツは場違い過ぎるぞ、英国紳士。

「エドワード、あたしまだ貴方を呼んでませんけど」

「マリイ、ジョー、任せたまえ。僕の力で見事、火を着けて見せようではないか！」

「だから人の話聞けよ」

コイツの耳にツツコミは届かないらしい。分かっているけど、本当にムカつく。

「ジョー、この枯れ草に火を着けてくれるかい？」

「うん！ でも、これじゃすぐに火消えちゃうよ？」

「大丈夫さ。じゃあ枯れ草を薪の上に置いて……マリイ、ジョー、危ないから少し離れて見ているんだよ」

「……危ない？」

おいこら、何する気なんだエドワード。

残念ながらその言葉は間に合わなかった。

「さあ燃えろ！ 僕の愛の炎の如く！！」

——ああ神様仏様。火柱が上がったんですけど。

向こうからお父さんとお母さんが駆けて来る。二人とも真っ青だ。当たり前だよばかやろう。もう二度と、キャンプにエドワードを連れて来るもんか。

それから三日間、エドワードに泣かれるまであたしはエドワードを無視し続けた。

第8楽章：倉田家家族日記（父編）

×月×日（日）

倉田浩司

今日は久しぶりに家で休める数少ない日だった。妻と子供達と一緒に休日を過ごすのは久しぶりだ。夏のキャンプ以来だろうか。キャンプでは謎の火柱騒ぎがあったりしたので中々気を休める事が出来なかったが、今日はゆっくり穏やかに過ごすが出来た。

しかしひとつ気になる事があった。

あの『恋愛なんか興味はない』と豪語していた茉莉が男の話をしていたようなのだ。茉莉が友達と電話をしていたのをうっかり耳にしてしまったのだが、どうもそうとしか思えない。（決して盗み聞きた訳ではない。偶然聞いてしまっただけだ）

確か『引き際を知らない男はウザイ』とか『アイツしつこく迫れば女はみんな落ちると思ってる』等と言っていた。

私の娘は一体どんな男に言い寄られているのだろうか。不安でならない。

そういえば『外国人はなんであんなに恥ずかしいセリフをすらすら言えるの』等とも言っていた。言い寄っているのは留学生か何かだろうか。

もし茉莉が外国人の彼氏を連れてきたら私はどうすればいいのだろう……。妻はいつかは彼氏ぐらいと言うが、娘はまだ十七歳だ。まだ早いのではないと思う。

頼むから二十歳前に国際結婚なんて事はしないでくれ、娘よ。

日本人にでも娘を取られるというのは、あまりいい感じがしないのだから。

+ + + + +

「……よし、と」

「あら、あなた何？ 珍しく万年筆なんて出して。それ日記？」

「ああ、丈に進められて始めたんだが、中々クセになつてな。書く
と案外面白いもんだぞ」

「そうなの。あ、そういえば今日また変な事があつたのよ」

「おい——また七味唐辛子でも飛んだのか？」

「今日は茉莉の傘がタッブダンスしてたわ……」

「……今度御払いでも頼むか……」

第9楽章：ソング オブ メランコリック レイン

しとしとと降る雨が窓のひさしに弾ける音が響く。今日は朝からずっとこの調子だ。強くもないし弱くもない、そんな雨が気だるげに降り続けている。あたしはべったりと窓に持たれ掛りながら、止まない雨を見ていた。

正直、あまり雨の日は好きになれない。偏頭痛で頭が鈍く痛むから。

早く晴れて欲しい。

「おやマリイ、君が外を見ながら憂鬱そうな顔をするのは珍しいね。でも憂いている君も夜露に濡れた白いカスミ草のようで儂く美しいよ」

「……うん、ジメジメしてるからね」

「マ、マリイ？」

不意にエドワードが変な声を出すもんだから、あたしは思わず振り返ってしまった。——て言うかまともにエドワードの話聞いてなかった。何言っただこのストーカーは？

問題の幽霊紳士エドワードは幽霊にふさわしい蒼白な死人の色の顔で私を見ている。しかもエドワードもこんな顔するんだ、なんて思ってしまうくらいに珍しく堅い表情で。

……でもお願いだからすぐ隣からガン見は止めて欲しい。

「何、エドワード」

「マリイ、君が僕の発言に対してツツコミを入れないなんて……！ そう言えば顔色も悪いね。もしかして体の調子でも優れないのか

い？」

「……エドワード、あたしがツツコミしないとそんなに不自然ですか？」

その心配のされ方は、ハッキリ言って嬉しくない。何なの、ちょっとボケに反応が出来なかったくらいで……いや、それ以前にあなたは芸人じゃないから。コイツと某お笑い選手権を目指してもいいい。

はあ、と小さくため息を吐くとそれは冷えた窓ガラスに白く残った。頭の奥にズキリとした痛みが走って、思わず顔をしかめてしまう。

ああ、痛い。

そんなあたしの心境を知らないエドワードはずっと不安げな顔のままだ。

「マリイ、気分が悪いなら窓際から離れていた方がいい。雨の寒さは体に良くないよ」

「平気よ、風邪ひいてる訳じゃないし、キツイ訳でも——」
「駄目だ！」

突然響いた声のあまりの大きさに、窓が脅えたように小さく震えた。

——びっくり、した。これはエドワードが怒った……のか？

「そんなに幽霊みたいに青白い顔してるのに。無理は止めるんだ、マリイ。いいからここへ来て休みたまえ」

「……うん」

今日は本当に珍しい事がよくある日だ。こんな態度を取るエドワ

ードを見たのは初めてかも知れない。『幽霊はそつちだろ』なんてツツコミを口に出せる雰囲気じゃなかったので、仕方なくエドワードに言われた通り窓から離れてソファーに腰掛けた。

「よろしい」

「……」

なんなんだろう、本当に。おとなしく腰掛けたあたしに、エドワードはいかにも紳士らしい動作でブランケットを掛けた。フワリと肩に被さる布に手の重さはない。いや、幽霊なんだから当たり前か。

——ああ、でも。

「……あつたかい」

「あんな冷たい窓に寄りかかっていたんだ、体が冷え切っていたんだよ。君は頭痛が気になって気付かなかったみたいだね」

「そつ……あれ？ あたし頭痛つて言っただけ」

くすりとエドワードが微笑んだ。多分そこら辺の女の子なら十人中八人は落とせる微笑み。見えたらの話だけだ。

「顔を見ていれば大体分かるとも。僕が百何年、人間を見続けて来たと思ってるんだい？」

「百何年……」

「それに君の事だからね」

エドワードはそつとあたしの頭に手を伸ばした。だけど、手は触れる筈の位置にあるのに何の感触もしない。エドワードが少し淋しそうな顔で笑った。

——当たり前だ。あたしは今を生きてる生身の人間で、エドワ

ドはとつくの昔に死んでる幽霊なんだから。触れられる訳がない。不意に思う。彼はこの百何年の間に、一体何人の人と言葉を交す事が出来たんだろう。

「……エドワード」

「なんだいまリイ？」

「紅茶、煎れてくれない？ 出来たらアップルティー。戸棚にフレイバーティー置いてあるから」

「え、いいのかい？ いつもは物を動かしたら怒るじゃないか」
「今はいいよ。お母さんいないし、動くのきついから……」

チラッとエドワードの顔を盗み見る。もう彼の顔には淋しそうな様子はなかった。

「お願いしていい？」

「もちろんだとも！ 腕によりを掛けて煎れてくるよ、愛しい僕のいまリイのために！」

「ありがとう。……『愛しい僕の』は余計だけど」

ツツコミを一切無視して、エドワードは楽しそうにターンしながら壁をすり抜け台所へと消えていった。

「……あーあ。変に期待されなきゃいいけど」

誰にも聞こえないように小さく呟いて、あたしはブランケットを掛け直した。暖かなそれは鈍く続く頭痛を少し和らげてくれる。

——だから今だけはちょっとエドワードにかまってあげる事にしよう。

幽霊の彼は、長い年月をきつと独りで過ごしてきた。大勢の人の人生を見ながら、たった『独り』で。だからエドワードはあたしにしつこいくらいにかまって来るんだろ。言葉を交して見つめ合える人だから。例え触れ合えないとしても。

エドワードが淋しそうな顔をしたのは、その触れ合えない壁を思い知らされたからかも知れない。

だから今だけは『二人』でいてあげる。
ブランケットのお礼に。

「マリイ、紅茶に入れるのは蜂蜜と砂糖どっちがいいかな？」

「えーと、蜂蜜でお願い」

雨垂れの音が微かに聞こえる。もう少しすれば雨が上がるのかも知れない。

取り合えず、雨が止むまでは幽霊紳士のエスコートを受けておう。

第10楽章：ワルツは除霊師と（前編）

危機だ。

完全、完璧に危機だ。今まさに、危機というヤツに見舞われている。

あたしがじゃない。幽霊紳士エドワードが、だ。

「……と言う訳ですね、ぱぱーとお被いして欲しいんですよえ、この家全体的に。お願いできますかしら？」

「心得ました。ご安心下さい、こちらはその道の専門家ですから」

「ありがとうございますう、そう言っただけなら心強いわあ。それにしてもお若いのに一人でなさるんですの？ 有能なのねえ！」

「いえ、最近祖父からやっと許しを得たばかりです。それに若いといっても二十三ですし」

「あらやだホントにお若い！」

「大学は去年卒業したのですが……やはりまだ若輩者ですかね、僕も」

「でもそんなにお若くて仕事を認めて貰ってるんですもの。若輩者だなんて、ご謙遜ですわ、ねえ！ ほほほ！」

「ありがとうございます」

そう言っただけ眼鏡を指で押し上げながら、その人はにっこりと笑った。

……ああもうお母さんの目が輝きまくってる。しかも何、そのちよつとキモイ猫撫で声は。まあ仕方ないか、この人エドワード並みに美形だし。そう思っただけあたしはチラリとその『その道のプロ』と名乗った男の顔を見た。

彼はお母さんが呼んだ俗に言う霊媒師——本人は『除霊師』だと

名乗っていた。眼鏡が似合って爽やかで、若くて顔も整ってて。数珠を首に下げて着物なんか着てなきゃとてもそんな職業には見えな
いだろう。選ぶ職業や服でここまで印象が変わるんだから、人間つ
てホント不思議だ。

不意にお母さんと話していた筈の彼が振り返った。

「……………」

こっそり見てた筈なのに、なんで！？

あたしは思わずビクリして目を逸らしてしまった。

霊能関係の人ってやっぱり勘も鋭いんだな……………。

目を逸らした瞬間、彼が笑ったように見えたのは気のせいだ。絶
対、気のせいだ。落ち着け、あたし。

…………… なんだか妙に背筋が冷えたのは何故だろう。

「くそう、爽やかなツラの下に男の欲望をひた隠しにして女性に迫
る、この陰険卑猥眼鏡めが……………！ 僕のマリイに流し目だなんて許
さんぞ、絶対許さんぞ……………！！」

「……………」

それは何キャラなんだエドワード。しかも何、陰険卑猥眼鏡つて。
せっかくのスマートな英国紳士っぷりが台無しだ。

だけど今日はウカツにそんな事ツッコめない。来ている人が人だ
から危険すぎる。エドワードがいる事はまだバレてないみたいだけ
ど、そんなアホな事しようものならきつとあたしは霊が憑いてるー
とか言われて除霊されて、幽霊紳士エドワードは見事に成仏してし
まう筈だ。

——あれ、それって良い事なのでは？

「ま、マリイ……お願いだから僕を除霊させたりしないで……！」
「……………」

あたしの冷たい考えに感づいたんだろうか。エドワードの本気の泣き顔が少し怖かった。悲惨な顔になるといつもより幽霊っぽさがアップするから止めて欲しい。マジで怖い。

しかし、こんな事になる原因を作ったのは間違いなくエドワード本人なんだから仕方ない。自業自得だ。毎日のようにヘンな物音を立てたり、引き出しを開けたり、傘を踊らせたり、七味唐辛子を飛ばしたり、そんなポルターガイスト現象が起こったらそりやお祓いだってしたくなる。

怖がつてるお父さんとお母さんに、あたしはそんな事するなどは言えなかったのだ。

「じゃあ、私はこれから町内会の集まりがありますので。あとはお願いしますねえ」

ニコニコと微笑むお母さんは泣いてるエドワード（と書いてポルターガイストの原因と読む）の股の下をすり抜けて、楽しそうに出て行った。

……見えない事って本当に幸せだ。

気を取り直しつつ、あたしは眼鏡の除霊師に向き直った。

「じゃあ、お願いします。……ぱーっと」

「うん。ところで君のそばに憑いてるあの人も、ぱーっとやっち

やっていいのかな？」

除霊師のお兄さんが微笑みながら指差した先には、空中でメソメソし続けているエドワード。指されているのが自分だと気付いて、エドワードはぴたりと泣き止んだ。

あれ、これは、まさか。

「……あの、見えてるんですか、彼が？」

「勿論。最初からいたよね、彼」

「ほーう、気付いてたのか、眼鏡君」

三者三様の間抜けな問答。

緊張感は何もない。何もないけど。

「あの、被っちゃう、んですか？」

「うん。君がそう望むならね」

「マリイにキザな言葉を吐くのは止めたまえ眼鏡君！」

緊迫感は何もない、けど。この状況は普通緊迫しなきゃマズいでしょう、エドワード。一応交わされてる会話はこの幽霊紳士をどうするかってことだ。……なのに。なのにエドワードはこの除霊師のお兄さんを『恋のライバル』としか認識してない。

少しは危機感感じるよストーカー。これ現実で言ったら警察に踏み込まれてその上現行犯だった、くらいの危機でしょうが。

「あの、いまいちどうするか決めかねてるんですが」

「マリイ！！　なんて冷たい事を……！　僕は傷ついたよ！」

大げさに叫んでエドワードはまた泣き崩れた。床じゃなくて壁に。ああ、平衡感覚が怪しくなるから止めて欲しい事この上ない。

「エドワード、成仏してくらい毎日言ってるでしょう」

「あ、そうだったね」

ころつと泣き止んだエドワードに、本気でお清めの塩を投げたくなった。

でも、今日はダメだ。初対面の人の前でそれはダメだ。あたしは何とか理性をフル稼働させてその衝動を押さえ込む。ああもう、疲れるわ。

「えっと、お取り込み中悪いんだけど」

にこーつと柔らかい笑みを浮かべながら、除霊師のお兄さんが話しかけてきた。笑顔も爽やかクールミントガム……ってそんな事を考えてる場合じゃない。

「今少し視てみた感じ、この家にいる幽霊ってこのエドワード君だけみたいなんだよね」

「それはそうだとも、マリイにおかしな者が憑いたりしないよう僕が日々守っているのだからね！　しかし『君』は止めたまえ。僕は公爵なのだから『クロムウエル卿』が正しいのだが、眼鏡君」

「ああ、それは失礼しましたクロムウエル卿。ついでに僕も眼鏡君じゃなく『なちきよたか那智清隆』と申します」

「な、ナチとは……また物騒な名前だ。ドイ●第三帝国軍か？」

こいつら馬鹿だ、話が脱線しまくっている。なのにあたしはツッコむ気すら起きなかった。面倒臭過ぎてかまってやるのも面倒だ。話の脱線具合にようやく気付いたのか、除霊師のお兄さんが急に

振り向いた。

「あ、ごめんね茉莉ちゃん。とにかくここにいる幽霊がエドワード卿だけだと……ちょっと困った事になるんだけど」

困った、事？

眼鏡の下に苦笑を浮かべながら除霊師のナチさんは眼鏡を押し上げた。黒縁眼鏡が妖しく光る。

「困った事、ですか？」

「うん。つまりね、払う対象が彼だけだとすると……君の意見を無視して払わなきゃいけないんだよね」

——はい？

言葉を失ったあたしとエドワードの前で、除霊師・那智清隆は朗らかに微笑んでいる。

さあつと冷たい風が吹き込むように、薄暗い不穏な空気が日曜午後二時半の倉田家の居間を満たしていく気がした。

除霊師は相変わらずニコニコしている。ハッキリ言ってこの場の雰囲気を見殺した不気味な程屈託のない笑顔だ。

さすがに幽霊のエドワードさえビビって天井付近まで距離を取っている。いや、幽霊だからこそビビるのか。

一般人のあたしにとって、目の前の人は普通に見れば単なるコスプレ野郎だ。

除霊師だと言う事実を知らなければ。知らなければ、あんな脅し文句なんか怖くも何ともない筈なのに。

あたしは思わずこの爽やか系除霊師に喰ってかかっていた。

「待つて！……最初はあたしの意見を聞くって言つたのにどうしていきなりエドワード被う事になるんですか？」

「そ、そうだぞナチ！僕は自らに課せられた第六感と言う大きな力に苦しむか弱き少女・マリイを日々良からぬ物から護る、言わば騎士！ナイトだ！僕はマリイにとって守護霊のような者の筈だが！？」

「……」

取り敢えずエドワードの発言は全て聞き流す。

つい責めるような口調になってしまったが、除霊師は気にも止めてないようだ。あたしとエドワードを交互に見ながら、首に下げた数珠をチャラチャラと弄んでいる。

……えーと。まさかイキナリ被ったりしないよね？

そんなあたしの不安をよそに、除霊師・那智清隆（エドワード風に言えばドイ・第三帝国軍）は至って穏やかに微笑んだ。

「いや、だってお金貰ってお被いせずに帰るなんて出来ないからね。そんなの祖父にはすぐバレルし。バレたら返金しろって言われるし……それに今更代金返す気なんてサラサラないからさ、一応仕事はしなきゃね。確実な収入のために」

「……」

——何その超絶自分勝手な発言。

「……陰険卑猥眼鏡ではなくて、君は陰険強欲眼鏡だな、ナチ」

あたしはウツカリその言葉に頷く所だった。エドワードにしては

的を得た発言だ。

しかし、つまり何か？ この除霊師は。

「……那智さんお金返したくないからエドワード被う気ですか」

「うん」

「つまりお金のためですか」

「うん」

思わずうな垂れた。

無駄に爽やかな笑顔の切り返しが憎い。ああ、つまりは。この爽やかフェイスの除霊師は、所詮猫被ってただけかよちくしょう！

何か無性に痛い物でこの除霊師の横っ面をブン殴ってやりたい気持ちに襲われた。コイツ一回気絶すればいい。

でもダメ、ダメよ茉莉。曲がりなりにもあたしはフツの女の子。

それが家に来た除霊師に暴言吐いたとか、鈍器で殴って昏倒させたとか、マジでシャレにならない。週刊誌に取り上げられそうなバイオレンスなネタだ。タイトルは『シリーズキルる子供達・進学高校女子生徒の暴走』で決定だろう。

……妄想し過ぎた。

でもつまり、あたしはこの健全な社会人に何も出来ないし、何も言えない。

ああ、全ての気力が失われていく。

「……そーですか。ああそーですね、お金は大切ですね、ホント」
「ま、マリイ！？ そこにツッコまないのはおかしくないかい！？」

珍しくエドワードがツツコんだ。出来るならあの除霊師にも替わりにツツコミ入れて欲しい。

あたしは暴言を吐かないよう細心の注意を払いながら、除霊師に再び向き直った。

心なしに怒りで口元がヒクつくが、もう気にしない事にした。

「あの、那智さん？ 抜わなくてイイものまで抜うのはどうかと思いますか？」

「抜わなくて良いかどうかは僕の方が良く分かる筈だけど？ こちらは仮にもプロの除霊師だ」

「……そりゃ、そうですね」

ヤバい。早くも言いくるめられそう。

「でも、そんなの職業乱用じゃないですか！ エドワードは別に悪霊なんかじゃ——」

“悪霊なんかじゃ——？”

ふとエドワード振り返った瞬間、過去の映像が脳裏をよぎった。

天井からぶら下がるモーニングスーツの幽霊紳士。壁から生えた恐怖の生首。数え切れないアホなポルターガイスト現象。日課になりつつあるウザイくらいの口説き文句。ストーカー状態を超えたほとんど住み込み生活。

“悪霊なんかじゃ？”

「……いやこれ悪霊かも」
「マリイいいい!!??」

エドワードの絶叫にハッと我に返る。マズい、思わず本音を溢してしまった。

当のエドワードは叫びながら号泣している。これはホントに泣いているらしい。よっぽど悪霊と言われたのがショックなようだ。

「酷いじゃないかマリイイ僕はこんなにも君を思ってるのにいい!!」

「ご……ごめんエドワードつい」

「っ、ついつて……!!」

慰めたつもりが余計泣いてしまった。

ああもう。自分のピンチのせいもあるのか、今日の英国紳士はかなりヒステリックだ。どうなだめれば良いのやら。

——だが、そんなあたしの思いを完全に吹っ飛ばす言葉を除霊師は呟いた。

「『悪霊かも』、ね……じゃあ彼を抜つても構わないね?」

ジャラン、と数珠が重い音を響かせた。

見れば那智清隆はいつの間にもやら数枚の御札を手に行っている。

「ちょ、ちよつと……!!」

不穏な姿勢と気付いて、なのに止める間はなかった。エドワード

が振り向く間さえも。

「——喝！」

鋭い、何かが弾け飛んだような音が響く。

次いで強く光った何かの眩しさに、あたしは思わず顔を防いだ。

「な、に……」

腕を下ろして見たリビングの中には、もうあの光も音も——そしてエドワードの姿もない。ただ、爽やかに微笑む除霊師・ナチとあたしだけ。

「はい、依頼完了」

足下にヒラリと一枚の御札が舞落ちる。シンとした部屋では、その紙の落ちた音さえ耳に届いた。

カサリ、と鳴ったそれに書かれた文字は達筆過ぎて読めない。

だけどそのグニャグニャした空恐ろしい文字は、あたしを強く不安にさせた。

「……エドワード？」

静まり反った部屋に余韻が消える。

あたしの眩きに返って来たのは、猫被りな除霊師の軽薄な笑みだけだった。

第10楽章：ワルツは除霊師と（後編）

落ちた御札が風に吹かれて音もなくフローリングを滑って行く。音もなく、泳ぐように。あたしは何も言えずにそれを見ていた。御札はまるで吸い寄せられるかのように微笑む除霊師の足元で止まった。彼が拾い上げたそれを着物の袖口にしまうのを見届けるまで、あたしは動く事すら出来ずにいた。

部屋中を張りつめた沈黙が支配している。
破ったのは震えかけた小さな声。

「……エドワード」
「いないよ」

呟いたあたしの言葉に間髪入れずに答えたのは、エドワードじゃなかった。

なんでアンタが答えるのよ。
——じゃない。そうじゃない。なんで、『エドワードが答えない』の。

除霊師・那智清隆は極爽やかに微笑んでいた。不意に自分じゃどうしようもないモノが込み上げて来るのが分かった。抑え切れない、胸がつまるような何かが。

「エドワード、は」
「僕は言ったよね？ 彼が『悪霊なら』被うつて。君は『悪霊かも』って答えた筈だよ」

那智は相変わらずニコニコと無害な笑みを浮かべている。言ってる事は全く無害じゃないクセに何でこんな顔が出来るの。

彼の眼鏡に反射したあたしの顔は、自分じゃ見た事ない表情をしていた。そう言えば動揺した自分の顔なんか見る機会がある筈ない。

ああ、でも。あたしは今までこんなに動揺したことなんかなかったつけ。

いつも見ない振りをしてたから。

見えなかった筈のモノが頭をよぎる。

突然足を引つ張る透けた蒼白い腕も、部屋の隅でうずくまる気味の悪い黒い塊も、流れる筈のない血で身体を赤く染めて助けを乞うもう死んでる誰かも。みんなが見えないならあたしも見ないんだと、心を凍らせていた。

そうすれば、楽、だった。

「だから抜った。それだけの事だよ」

でも。

今は楽じゃない。

見えない筈のモノがまた見えなくなっただけの事なのに、全然楽じゃない。

「それだけ、って……いくらなんでも酷くないですか？ エドワードだって、百年くらい前までは生きた人間だったんですよ？ 確かに今は幽霊だし、ストーカーだし、迷惑も一杯かけるバカだけど……でもエドワードは人間で……自分の意思がある、人だったのに」

いや、エドワードはもう人じゃない、幽霊だ。そんな思いが脳裏をよぎる。

でもこの際そんな定義はどうだっていい。

要はあの幽霊紳士が曲がりなりにもまだ自分の意思を持っていて、それは揺るぎようがないって事。それをあたしも知ってるって事。

幽霊紳士エドワードは彼の『思い』そのものだった。百年以上もさ迷い続けてそれでも消えられなかった思いの塊。

それをこんなにあっさり消してしまうなんて。

「ちよつとでも話したら分かる筈でしょう？ エドワードは誰かを傷つける悪霊なんかじゃない。それなのに本人の納得も何もなしに抜うなんて、そんなの困ります、あたしは——」

自分の言った事に思わず言葉が途切れた。

「……『あたしは』、の続きはなんだい？」

あたし、は？

あたしは、何？ エドワードが抜われたらなんだって言うの。

だってエドワードは幽霊で、ストーカーで、腐れ縁で、不本意だけど同居人で、でも友達みたいで、家族みたいで——だから。

エドワードがいなくなったら、あたしは。

「『エドワードがいなくなるのは、嫌』……かな。つまりは」

言い返したかったのにグツとつまってしまった。だって、このム

力つく眼鏡の言う事は間違ってる。

「何だかんだ言っても彼が好きなんだね。付き合ってるの？」
「違います！」

それは違う。断固として違う。力一杯、神様仏様に誓って言える。

那智は笑っていた。さっきと微笑み方の質が違う。なんだろう、からかってるような笑い。

ちよつとだけカチンと来た。

嬉しいやら情けないやら。唐突な怒りは動揺を鎮めてくれた。

「エドワードとはそんな関係じゃありません。ストーキング行為を許可した覚えも、付き合いをOKした覚えもありません」

「じゃあ君がOK出せば付き合う訳だ」

「……出しません無理です。彼氏いないけど百歩譲ってもストーカー幽霊は嫌です」

「ふうん？ かなりの美形なのに」

「あたしB専ですから」

「おや勿体ない。でもまあ良い機会だし作ればいいと思うよ、彼氏。ストーカーがいなくなった今なら、どこでデートしようがどんな付き合いしようが影響は全くない筈だけど」

そう言っただけで那智は爽やかに微笑んだ。隣の国からやって来た“ペ”の付く貴公子ばりにナチュラルに。

眼鏡が微笑みと共に煌めいた。

「……はい？」

「作りなよ。いないんでしょ、Bの彼氏」

にっこり。

……バカにされてる。小学生でも分かる程度の言語レベルでバカにされてる。

こんちくしょう。スゴい腹立つ。

て言うかこんな事話してる場合じゃない筈だ。

「あの話それたんで元に戻しますけど」

「どうぞお構いなく」

「……那智さん、エドワードを返して下さい」

こんな時はストレートに言った方が良い筈だというあたしの考えは当たっていたらしい。ずっと茶化すような態度だった猫かぶり除霊師の猫がズリ落ちた。

ほんの少し、那智清隆の爽やかヅラから微笑みが引いた。

「返す？ 除霊師が一度封じ込めた霊を？ 自分の言った事に責任はちゃんと持った方がいいよ、茉莉ちゃん。僕は彼が『悪霊だ』との確認を得て封印したんだ。此方の手間も考えずに今更返せって、迷惑だとは思わない？」

ズリ落ちた猫の下には、どうやら独裁主義者がいたらしい。さすがナチ。それでも微笑みは絶対に絶やさないからかえって怖い。

だけどあたしがそのくらいでビビるなんて思うなよ、このコスプレ眼鏡。

トータル半年以上のストーカーに耐え抜いた精神を甘く見るな。

「でも、エドワードは一度も成仏したいなんて言ってないじゃないですか」

つかえないように深く息を吸う。何故だろう、エドワードの姿が瞼に浮かんだ。

「消えたいとも言っていない。せめて自分がどうしたいかくらい聞いて下さい、エドワード本人に。相手はいちおう礼儀作法は心得てる英国紳士なんだから、話し合いくらい出来るでしょ」

「……………」

暫く待っても返事はなかった。

押し黙ったきり目を伏せて、彼は真面目な除霊師の顔で数珠を揉んでいる。チャリチャリという音が規則的に響いて、不意に止まった。

眼鏡の下の瞳がこちらを見た。視線が絡み合う。那智はもう笑ってはいなかった。

「気付いてると思うけどね」

さっきより大分暗いトーンの声で那智清隆が呟いた。笑ってる時よりずっと怖い。

「例の公爵は成仏したいとは言わないよ。絶対。あんな煩悩まみれなのに」

「……………でしようね」

溜め息混じりで言われて、ちよこつと罪悪感に見舞われた。そりゃそうだ。あんなにキザで、自分勝手に、ねちっこい幽霊がイキナリ成仏したがる訳がない。

今更だけどエドワードは非常にらしくない英国紳士だ。精神面の爽やかさが皆無に等しい。

「それに、これは気付いてないと思うけど……君といえる限り、彼は成仏出来ない。しないんじゃないかね」

——は、い？

「……出来ない？」

「うん。執着心が強すぎる」

心底呆れたように数珠を持った手を掲げて、那智清隆は天井を指差した。

「話し合う必要もない。彼は何度被ったって帰って来るよ。君の所に」

「いかにもその通りさ、僕の愛しの君！」

——あれ、これは。

耳馴れた高笑いが部屋にこだましている。耳馴れ過ぎてウザいくらいの、あの声が。

あたしはソロソロと、盗み見るように徐霊師が指差す先を見た。

「なんだいマリィ、化物でも見たような顔をして」

「……………」

半分そーじゃねーか。そんなチンピラ臭いツツコミが浮かぶ。
浮かんだだけで口には出なかった。

あたしはただ、ポカンとした顔で見ていただけ。

「あ。遅くなつたが、ただいまマリイ！ 一瞬天国を見て来たが、
天使達の微笑みよりも君の悪魔のような冷たい笑顔に焦がれて帰っ
て来てしまったよ。でもやはり君は花がほころぶように屈託なく笑
う顔が一番魅力的だ……マリイ、どうか微笑んでくれないかい、僕
の墮天使？」

……………くっさい。

齒が浮きすぎて抜けるんじゃないかと言う勢いでクサイ。一回抜
われたワリに何この絶好調の口説き文句。しかもツツコミ所が満載
だ。

そのくせ、あたしはやっぱ何も言えずにぼうけたように彼を見
ていた。

だって何も言えない。何から言ったらいいのか分からない。

「おおそうだなチ、いきなり僕を抜うなんて物騒な事は止めたまえ
！ 驚いたじゃあないか」

「……驚いたで済むのはあなたくらいですよ、公爵」

ポカンとしたままのあたしの前で二人は極フツーに会話をしてい
る。いきなり抜われたのに、大して気にも留めてないみたいだ。那
智清隆もしくり。

一番びっくりしてるのは、多分あたしだ。
だって消えてしまったと思った。もう会えないんだと思った。
もう、一緒にはいられないのかも知れないと。

「……エドワード」

呼び掛けにモーニングスーツの幽霊紳士はきょとんと首を傾けながら微笑んだ。いつも通りの美形が三枚目に変わっちゃうヘタレた
笑み。

「何だい、僕のマリ……い、て、えええ!？」

唐突にエドワードが叫んだ。

「な……どうしたんだい！ まさかこのナチズムの化身に何かされたのか、マリイ!？」

「何もしてませんよ。どう見たって泣いてる原因はあなたでしょう」

泣いてる、原因？

そこまで言われて初めてあたしは自分の頬から顎へ滑り落ちる感触に気が付いた。ぬるい水の感触が頬に細い線を作っている。

瞬いたら、ぱたり、と床に雫が触れた音がした。

「ぼ、僕のせい？ まさかそんな……あ、僕の不在がそんなに悲しかったのかいマリイ？」

「ポジティブ発想ですな幽霊のクセに」

「クセにって言うのは止めたまえナチ！」

バカバカしいやり取りを目の前にして呆れている筈なのに、あたしの涙は止まらなかった。

ばたばたと雨漏りみたいに理由なく溢れるそれを止める方法が分からない。雨漏りみたいに塞げば止まる訳じゃない、どうすりゃいいのよ。

「……では、茉莉ちゃん。今回の依頼はこなしたので本日はおいとまさせて頂きます」

「何っ!？」

泣いてるあたしを完全無視した霊師・那智の唐突な別れの言葉にエドワードが勢いよく振り返った。

爽やかな微笑みは、やって来た時と同じくとても人当たりの良さそうだ。本っ当に顔だけは害がない。

「依頼は『この家にいる悪霊の除霊』です。『戻って来た霊の除霊』

は含まれてませんからね……ですが本来そちらも希望があればその場で除霊するんですが、今回はそれを望まないようですし。料金は

『家人希望のため見逃し』という事で全額受け取っておきます」

「ふん、失敗したのに金取るのか。さすがはナチ、横暴だな!」

「今すぐ地獄に叩き落としますよ?」

「……」

エドワードを黙らせて那智清隆はにつこりと笑った。ジャラリと音を響かせて数珠を懐にしまい込む。ふと、眼鏡の奥の瞳に意味ありげな光が浮かんだのが見えた気がした。

「冗談です、疲れるからそんな事しませんよ。では茉莉ちゃん、クロムウェル卿……いずれまた」

羽織の袖から覗く手をヒラヒラと軽く振って、最後まで完璧な笑

顔を演じたまま除霊師はリビングから出て行った。

程なく玄関の方から扉が閉じる音がしたけれど、あたしとエドワードはポカンとつつ立っていた。見送りそびれたと気付いたのはそれからたっぷり一分以上は経ってからだ。

だって——……あの人、最後になんて言った？

「いずれまた、ってどういう」

「あの陰険強欲卑猥眼鏡……いずれまたとは何のつもりだ！ ナンパか！？ ナンパなのか！！ しかも僕のマリイを……『ちゃん』付けで……！」

重要なポイントが違うだろバカ紳士。

でもあまりにも呆れたおかげか涙腺の弛みが治まってきた。ああ、涙が鼻に流れて痛い。

グズグズする鼻をすすって手の甲で涙を拭う。と、何かがすい、と鼻先を通り抜けた。

「マリイ、真っ赤になっているね」

エドワードの透明な指先がそこにあった。

温度のないそれは、どうやらあたしの鼻に触れようとして失敗したらしかった。

「まあ、ね。こんだけ泣けばそうなるわ」

濡れた手を見つめて答えた。何故だかエドワードを見てそれを言うのにはためらいがあったのだ。

強がりしたい、のかも知れない。他の意思はないと思う……多分。

「マリイ」

こちらを見て欲しいと言うニュアンスを含んだ呼び掛け方だった。そんな細かい事に気付ける程、あたしはエドワードと長らく一緒にいたのだ。そういえば。

わざわざ向いてやる必要なんかあるのかとも思ったけど、何でかエドワードと向き合わないといけないような気もした。理由は自分でも分からない。でも何となく、そんな気がする。

顔を上げると真っ直ぐあたしを見るエドワードがいた。

そういえば、こんな風に真っ直ぐ誰かと向き合うのは久しぶりだ。

「君の涙を見ていると不安になるよ」

呟かれた声は、切実な響きを押し殺しているように聞こえた。

エドワードが涙でぐちゃぐちゃなままのあたしの目を覗き込む。彼は真っ直ぐに私を見つめている。透けた瞳の色は空色に近い澄んだ青だった。

「……何よ」

「君の涙が真珠に変わったたりしないだろうかと不安になってね。泡になって消えた人魚姫のように、君も僕の前からふっと消えてしまいうそで……マリイ、何時も目を離せない」

思わず顔をしばいた。

何よ、それ。

いつものエドワードの口説き文句なのに、いつもと違う。だってエドワードはこんな言い方しない。こんな不安げな言い方は、絶対に。

天国で頭でも打ったのか。

そう思っくらい、真面目な顔をしたエドワードがそこにいた。

「あたしは、消えたりしない。生きてるから。どっちかって言うと消えるのはエドワードでしょう」

幽霊なんだし。

そう呟いて、あたしは初めて理解した。

エドワードはとても曖昧な存在なのだ。

自分の意識があるクセにいきなり消えてしまったり、逆に消える事も出来ずに留まったりする、とても曖昧なモノ。者ではなく、物でもない。

そういう存在なのに勘違いして安心しきってた。

エドワードは、いつもここに居て、ちょっと鬱陶しかったり面倒くさい事もあるけれど——でも、これから何も変わらない存在なんだ。

「では僕が消えなければ、君が消えたりする事もないんだね」

「……は？」

意味が分からず、つい口に出した答えは剣呑なものになってしまった。

でもエドワードは笑った。ヘラツとした、英国紳士だったなんて信じられないくらい気さくな顔で笑った。

「幽霊の僕はいつ消えるかも分からないけれど、君がいる限り消えたりしない。君は生きている人間だから簡単に消えたりしない」

一言一言しっかりと伝えるように、エドワードは言葉を紡いだ。

「素晴らしいねマリィ、僕はとても確かなものを愛している。君がいてくれる限り僕は消えたりなんかしない。君は僕が『ここにいる』事を証明する、何よりの真実なのだよ——百余年さ迷った旅路は無駄じゃあなかった」

「……エドワード」

「今ここにいられる事がなにより僕は幸せだよ、マリィ！」

高らかに声を上げて幽霊紳士は空中に舞い上がった。

「何それ……凄いポジティブ」

「そうでなきゃ幽霊なんかやってられないさ！ いい方に考えるのを止めたら悪霊になってしまうよ。それでは君を護れないだろう？」

ばつちりウインク決めたエドワードを見て、あたしは取り敢えずもう笑うしかなかった。

涙でぐちゃぐちゃなまんまであたしは笑った。

エドワードは結局相変わらずなんだ。

成仏しかけても帰ってくる、しぶといしぶとい幽霊紳士。

曖昧なのに確かな、そんな存在にあたしの方がとても救われているのだと、そう気付いた。

いつも邪険に扱ってるけれど。

「……ありがと、エドワード」

ほんの少しは、感謝してる。

でもそれは小声でしか言えなかった。たった十年ちよつとの人生で培われたプライドが、邪魔をしてしまったから。

「む？ 何か言ったかいマリイ？」

「いえ何も」

「そうかい？ ねえマリイ、失礼だけど凄い顔になっているよ」
「……うるさい」

でも、それはつまり『いつものあたし』で。
エドワードは疑問に思ったりしなかったらしい。……それはそれでなんか悔しい。

ふと、玄関からカチャカチャと音が聞こえた。どうやらお母さんが帰って来たらしい。

——あ、しまった。こんな顔じゃ出迎えられない。

「ちよつと顔洗ってくるっ」

あたしは慌てて洗面所に駆け込んだ。

蛇口をひねったのお母さんの声が聞こえたのはほぼ同時だった。

「ただいまあゝ！ あら、茉莉？」

「……洗面所っ」

バチャバチャとあからさまに音を立てて顔を洗いながら叫ぶ。我ながらなんてベタな取り繕い方。

玄関からがさがさと買い物袋の音が聞こえた。どうやらお出かけついでに買い物まですませて来たらしい。さすが主婦だ。

「大変だったわよこれ一人で運ぶの。あら、ところで那智さんは？ もうお帰りになったの？」

「うん、意外と早くすんだから」

——エドワードが成仏させられたりしなければ。

そこまではさすがに報告出来なかった。ていうか除霊師呼んだ意味何もなかったなあ今日は。

「あらーそうなの、残念だわあ。もう一回くらいあの韓流スターみたいなお顔見たかったのに！」

首から下はコスプレまがいの韓流スターってどうなのよお母さん。大体あんな腹黒いナチズム除霊師なんか、あたしは二度と見たくない。

蛇口をひねって水を止める。タオルで顔を拭きながらリビングに戻りかけた時、ふわりとエドワードが飛んで来た。

何故か、真っ青で。

「ま、マリイ、何かおかしいのだが……君のお母様がリビングに入った途端、部屋の外に弾き飛ばされてしまった」
「え」

弾き飛ばされた？

何だかよく分からない。分からないが良い予感はない。

取り敢えずあたしだけリビングに戻った。お母さんは至ってフツウに買い物して来た野菜を片付けている。変わった所は何もない……と思うけど。

ふと透明なビニール袋の内側から何かが透けて見えた。

開いた携帯くらいの大きさの、白い、ミミズがのたくったような字が書かれた、紙。

——あれ？

コイツには覚えがある。

でも、まさか、コレは。

「……お母さんコレ」

「アラいけないそんな所にあつたのね！ 実は帰りに那智さんを紹介してくれた方に会ってね、貰っちゃったの。良く効くらしいのよ」
「ポルターガイストに」

いやそんな『虫に効く殺虫剤』みたいな気軽な言い方はないでしょうが。仮にもこれはありがたい御札なのに。

お母さんは慌ててビニール袋の底にへばりついてたそれを取り出した。ちよつとヨレてる以外はなんともない。

経緯だけ聞くとスゴくうさん臭いけど、効果はどうやら本物だ。だつてお母さんが持つてただけでコレだもの。

部屋に貼られたりなんかしたら大変だ。

——でも、お札って普通貼るものだよな。

「お母さんそれ」
「うん？」

ぺた。

軽い音を立てて、それはリビングの壁のど真ん中に貼り付けられた。

要するに、間に合わなかった。

「なあに、茉莉」

「……何でもない」

あたしはそつと窓の外を見た。玄関の前、閉め出されたエドワードがシクシク泣きながらドアの前に立っている。

ああ……やっぱりか。

「お母さんそれいつまで貼つとくの？」

「うーんお祓いもして貰ったし、一ヶ月くらいでいいんじゃない？
そしたらまた那智さん呼んで見てもらいましょ」

「また呼ぶの？」

「だってホラ御守りや御札って、使い終わったらお寺さんに帰してあげなきゃいけないじゃないの。専門の方に頼まなきゃ」

一ヶ月。しかもまた那智清隆が来る。

泣き叫ぶエドワードの顔が見えるようだ。ついでに黒い笑みを浮かべた那智清隆も見える気がした。

今日はマジでエドワードにとっての厄日らしい。

それからあたしが隙を見てニセモノの御札と本物の御札を取り替えるまで、エドワードはずっと玄関の朝顔の鉢に座ってメソメソしていた。

その朝顔が風もないのに葉っぱがざわめく『お化け朝顔』として近所で有名になったのは言うまでもない。

第11楽章：旅は道連れ、世は情け（前編）

「おはようマリイ！ 今日も君は春の朝霧のように儚げで美しいね。僕もその唇に宿る桜色の艶めきの中に溶けてしまいそうだ……その唇で、僕に今朝の挨拶をつむいではくれないのかい？」

「……おはようエドワード。ついでに言わせて貰うなら、まだ桜は散ってません。っーかまだ咲いてません。開花宣言があったのは一昨日です」

寝惚けまなこを擦りながら、目覚まし時計よりも早くそしてウザったいご挨拶へ冷たく返答する。対するエドワードは相変わらずテンションがハイだ。

「僕の目の前にはもう咲き乱れているんだよ、マリイ。素晴らしき恋の花が……まさにこれは薔薇色の人生——（La vie en rose）！」

「少し黙れやかましい」

人の睡眠時間削りやがってこのやろう。

エドワードはいつもきっかり六時半にあたしを起こす。お陰で七時にセットした目覚まし時計がその威力を発揮したのは、もう何カ月も前だ。

何のための目覚まし時計だ。意味ねーよ。

そんな訳で倉田家におけるあたしの朝は、本っ当にいつも通りだった。

いつも通りの幽霊紳士の朝のお言葉。あのくっさい語呂がよくなならない物だと、変なトコで感心するのもいつも通り。

だけど——何だろう。妙な違和感が背中を掠めた。

「……ねえ、エドワード」

「なんだいマリイ？」

「何かこう……妙な感じがするんだけど、家の周りに何か変なのいない？ 例えば悪りよ——」

「何っ!？」

全部を言わない内に、スゴい勢いでエドワードは窓に飛んだ。窓ガラスにダーツみたいに突き刺さり、物凄い形相で辺りを見回す。ニワトリかハトみたいに首をしゃきしゃき動かしてくまなく見回している姿は、なんかこう、貞子にも通じる怖さがある。

——やだ、動きがキモい。

なんだかホラー映画に出てそうだ。こんな奇抜な幽霊。

「……エドワード、それ止めてちょうだい」

「少し待ちたまえマリイ！ 今はまだ探索中だ。変な虫は一匹足りとも見逃す訳にはいかない。僕らのこの愛の巢に、なんびと足りとも近付けるものか!」

「愛の巢じゃねーよ」

へたに靈感ある人が見たら、卒倒されそうだ。この見た目はまずい。

第一、キモい。あたしが耐えられそうにない。

「良いからやめ——」

「うわああ!?!？」

言葉は中途半端に遮られた。

叫んだのはエドワード……ではない。それはこの部屋の真下、一階から聞こえて来た声だった。

「……今のは」

「ジョーの声だね？」

何で、丞が叫ぶの？

妙な予感ほもはや最高潮だ。あたしは思わず布団を蹴り飛ばし、リビングへの階段を駆け降りていた。

後ろで何か叫んだエドワードの声も聞こえたけれど、止まる訳にはいかない。

エドワードは知らないのだ。自分が来るまでのこの家でのあたしと丈の事を。

ザワザワと背中を掻きむしる予感。これは、何。

これがもし——悪霊、だったら？

もし丈が“身を守らなければならない”状況なら——急がなければ。

エドワードに常に見張られてる（ストーキングとも言っが）あたしよりも、丈は身を守る術が少な過ぎる。

「丈……！」

そしてリビングに滑り込んだあたしが見たのは——。

「あ、お姉ちゃん」

「あらあ、可愛いお嬢ちゃんやねえ。御早う御座います。そないに血相変えてどないしはったん？」

すつごい違和感に満ちた京言葉を話す、薄い着物に身を包んだ幽霊の女の子がそこにいた。リビングで丈と差し向かいに座って、のんきにお茶なんかすすりながら。

……止まり損なつてスライディングしたのは言うまでもない。

「わああお姉ちゃん！？ ケガするよそんなムボーな事したら！」

「いやー吉●新喜劇みたい！」

焦った叫びと共に駆け寄ってきた丈とは対照的に、女の子はケタケタ笑っている。

なっ……なんなんだ、コイツは。

「……スライディング……したくもなるわよ。大体、何、あなた？ 勝手に上がり込んで、この家に何の用？」

「そないに睨まんといてえな、怖い娘やねえ」

キツと睨み付けたあたしに、その女の子はウフフと笑いを返す。ご丁寧に袖で口元を隠しているから、かえって嫌味だ。多分自覚しちゃいないだろうけど。

「あんねえ、うち、ちょっとわけありでここにお邪魔させて頂いたんどす。風が吹くまで、すこおし、居させて貰うさかいに」

「残念ながらそれは却下だよ、レディ。即刻立ち退きたまえ！」

振り返れば、いつの間にか仁王立ちのエドワードがそこにいた。

逆立ちで。つまり天井に立つて。重力無視は幽霊の特権だ。……
塩まいて叩き落としてやりたい。

「エドワード……」

「どうだい、マリィ！ 少しはこの不作法なレディにも牽制になつたろう？」

「喜んでるから」

「え」

お腹を抱えて、その子は爆笑していた。何やのその格好宝●の男役みたいやーん、と叫びながら。

……どうしよう。すごいマイペースだ。人の話を全く聞いてない。ある意味エドワードより扱い難い。

ああ……なんであたしの周りにはこんなタイプの人——もとい幽霊ばかりが集まってきてしまうのだろう。思わず頭を抱えてため息を吐いた。

「……ねえ丈、この子一体……」

「えっとね、ぼくが顔洗いに洗面所に行ったら、落ちてきたんだ」

「え、落ちてきた？」

「うん。エドワードこうしゃくみたいだね、天井からすり抜けて、ポトツて」

それは……変だ。

この家はエドワードが悪霊避けバリア（エドワード曰く“愛のオーラ”だそうだ）を張っているから、そう簡単には幽霊は入ってこないハズだ。

——それを、すり抜けて落ちてきた？

未だに爆笑し続けるその後ろ姿を盗み見る。至って普通の幽霊にも見えるけど、彼女はどうかやら、ただものではない。

「あー……ちよつと、あなた」

「え？ 何、うち？」

「そうそう。えーと、何でまたこんなヘンピな家に落ちてきたの？ それにワケアリって？」

ちよつとポカンとした顔をして、女の子は首を傾げた。

——あれ？

突拍子もないシチュエーションだったから気付かなかったけど、結構上品な顔立ちの子だ。

なんて言うか、その服装も歴史の教科書に載ってる……古代のお姫様の装束みたい。天女のような、と言えば正しいだろうか。透けてしまいそうな、フワリとした着物。肩に掛けている布もシフォンみたいに薄くて柔らかそうで、何だか“天女の羽衣”みたい。

「春風がねえ、さっき止んでもうたんよ」

「春風？」

「そお。だから出ていきたくても、待たなあかんのよねえ。次の風が吹くまで」

次の風——？

いまいち要領を得ない答えに、あたしとエドワードは揃って首を傾げる。

頷いたのは、意外な事に丈だった。

「そうかあ、だから落っこちちゃったんだ！　じゃあ次のがふくま
で、うちのベランダにいるといいよ。風が来たらすぐわかるもん」
「まあ、ほんまに？　坊っちゃん、よう話が分かる子やねえ。おお
きに」

「うっん、どういたしまして。それに『よはなさけ』なんだよ」

にこにこ笑顔を交わす、丈と女の子。とっても和やか……って、
あれ？

「ちょ……ちょっと待ちたまえ！　何でそうなるんだいジョー！？」

エドワードの叫びが虚しくこだまする。

あれよあれよと言う間に、何故かその子は家に居着く事が決定し
ていた。

第11楽章：旅は道連れ、世は情け（中編）

「あー、何時までいるの？　ここに」

「だからさつきも言うたやないの。次の風が吹く・ま・で！」

ベランダの手摺にちょこんと腰掛けて、女の子はプウッと頬を膨らませた。

ちなみにここはあたしの部屋のベランダだ。意気投合している丈とこの子には悪いけれど、さすがに弟と幽霊を二人つきりにさせるわけにはいかない。

心配過ぎる。と言うわけで彼女にはあたしの部屋に来て貰ったのだ。

——エドワードの必死の拒否を無視したのは言うまでもない。

天女みたいなひらひらの着物から覗く素足を、彼女はプラプラと揺らしている。

今更ながら、幽霊の足を見るなんてなんか妙な気分だ。それとも、もしかしたらこの子幽霊じゃあないんだろうか？

あたしはボンヤリと住宅街に視線を移した。

風はピタリと止んでいる。まだ蕾だけのお隣の桜の木は静かに春風を待っていた。

「もう……聞かん子なんやねえ、お嬢ちゃん。風吹いたらすぐ出ていくさかい、もうすこおしくらい待ってえな」

やれやれと言ったその風情に、何だか少し腹が立った。

いや、だってね、確かにこの子は幽霊で間違いなく私よりは歳上

になるんだろうけど——自分より見た目も小さい子に“お嬢ちゃん”扱いされるのは、やっぱりあんまり面白くない。

大体なに、風が吹いたら出てくつて。

「じゃあ待つけど……」

「風とやらが吹いたらすぐ出て行きたまえ、レディ！」

横からズイツと飛び出してきたエドワードが強気に宣言した。

「即刻に、だ。分かったかい？ 承知したかい？ お返事は？」

「分かった分かった分かった！ もおーキャンキャンかましい兄さんやねえ、アンタ！」

「どっちもうるさい！！」

「……ごめんなさい」

「……申し訳ない」

謝る姿はしおらしいけど、お互い牽制しあっているのが丸見えだ。見えない火花が確実に散ってる。

どうやらエドワードはこの見知らぬレディがあたしの部屋ににいるのがかなり我慢ならならしい。

親身に嫌がってくれるのはまあ嬉しいんだけど——でも根本的に、エドワードも正しくはこの家の住人じゃない。住込みのポルターガイストと言うか、ストーカーと言うか、なんと言うか……つまりえーと、そんなんだし。

結論。ここはあたしん家であってエドワードの墓ではない。

しかし、ギスギスした殺気を撒き散らすエドワードに対して、彼女はどこ吹く風と言った態度を貫いている。

凄い、その凶太さを半分でも欲しい。

しかし本当に、風はどこに吹いてるんだろう。

早いところ、ここにも吹いて来て欲しいんだけど。

「……あ、そう言えば」

「なあに、お嬢ちゃん」

「春風が吹いたらあなたどこに行くの？」

あたしの他愛ない問いかけに、にこ、と笑って彼女は遠くを指差した。

「北に行くんよ」

「おやおや北とはまた、曖昧だね。出ていった所で目的地もないのかい」

「当たり前やろ。北の何処かは風次第なんやさかい、うちが決めるんとは違うんや」

「……風次第？」

どういふ事？

しかし問う間もなく、隣でイライラした声が上がった。

「流されてばかりの人生か。ハッ、虚しいね」

「残念やったねえ、うちコレ好きでやってるんよ。各地には毎年うちの事待ってる子もおるんやから？」

「アイドル気取りかい？ 年増のクセに」

「ふんっ、ナルシストのクセに」

「なっ……僕は至って謙虚な幽霊だとも！」

「謙虚なお人は自分から謙虚やなんて言いませーん」

「……ちよつと、アンタら」

もの凄いピリピリしたムードに耐えきれずに掛けた声は、アッサリ無視された。

コイツら本気で人の話を聞かないのかちくしょう。

「自意識過剰な者に言われたくはないね」

「誰が自意識過剰やの」

「ちよつ……」

「君だとも。自分が可愛いとも思ってるんだろっ？」

「女の子に失礼やんか！ 大人気のない兄さんやなあ、全く」

「ねえ……」

「君だつてそうだろう？ 明らかに僕よりも死んでから経ってるじやあないか。増えたのは皺だけで、知性はそのままなのかい？」

「まああー!!」

「お……」

「おや、凶星かな」

「そんなわけあるかいな！ 兄さんこそ鏡見てきはつたら？ ずいぶん若作りしとるようやけど、綺麗なお顔に皺増えとるんやないのお？」

「なっ、何をおおっ!？」

「き……」

「言われて怒るのはホントは自分でもそう思ってるって証拠なんよ、お馬鹿さん!!」

ブツン、と頭のどこかで音がする。

……さすがにキレるわ。

こんな……こんな……こんな、半端ないシカトされたら！

「いいっ加減おまえら黙れえッッ!!」

——バシッ!

女子高生らしきなんかなぐり捨てたサブマリン投法で、振り被ったお清めの塩を投げ付けた。怒りを込めた渾身の打球は、きっと百キロ台は出ただろう。

ベランダが塩まみれになったかわりに、ふたりの幽霊は霧散した。

第11楽章：旅は道連れ、世は情け（後編）

「……ごめんなさい」

「……申し訳ない」

「おとなしくベランダに正座してなさい。じゃないとお前ら、また塩撒くからな」

しばらくしてうつすら戻ってきた二人は——何と云えばいいのか。分かりやすく説明するなら、ちよつと萎れていた。塩かけられて萎れるなんてナメクジか幽霊くらいなもんだらう。

透明感も確実にアップしている。

OLさんが喜びそうな単語だ。『透明感アップ』。この場合マジだから羨ましくとも何ともないけど。

「……返事は？」

「はい！」

「イエス、ママ！」

どうも、このまま行けばあたしは塩撒きのプロになりそうだ。嫌だそんなプロなりたくもない。

——しかし結局、“次の風”とはどういう事なんだろう。

聞こうと思って見れば、彼女はエドワードとまた睨み合っていて、どうやらあたしは視界に入っていない。

「睨み合うなバカ共」

「はい！」

「イエス、ママ！」

高く構えたフォームだけで（塩撒きの、だ）、二人は睨み合いを止めた。

しかし、どこぞの軍隊みたいな返事は止めて欲しい。あたしゃ一体どこの軍隊の將軍だ。

ともかく苦労は確実に報われて来ているらしい。お清めの塩の効果も捨てたもんじゃないのだ。ざまあみろ、何もしてくれない神様め！

……だけど根本的に増えた疑問は減っていない。
何なの、いつたい。

ふとその時、彼女がお隣の小さな桜の木に視線を落とした。

「どうしたの？」

「薺。まだ、小さいんやね……」

ポツリと呟いて、彼女は急に——本当に急に、泣きそうな目をしたのだ。

じつと桜の木を見詰める瞳はあまりにも透明で澄んでいて、何か思い詰めている感じがした。もちろん比喻だ。この際マジで透ける事は抜きだ。

エドワードもあたしも、つい、言葉をなくしてしまう程、彼女の瞳は子供のそれではなかった。

「……あんねえ、待つとる子がおるってゆったんは、ホントなんよ。うちも早く此処から出て行きたい。出て行きたいけど、でも……春風が吹かんかったら、うち、何処にもいけない」

何処にもね、いけんのよ……—。

呟きながら溢したため息は動かない空気に響く事なく消えた。

春風が吹かなきゃいけない理由はやっぱり分からない。けれど、彼女が本気で困っているのは分かった。とても良く分かってしまった。

さっきまでの大騒ぎはとても迷惑だったけど、さすがにこんな泣きそうな子を放ってはおけない。

「だっ……大丈夫。風くらいすぐ吹くって！ 今朝まで凄かったんだから、ね？」

「せやったら、ええんやけどね……でも、ほんまにいつ吹くんやろ。一時間後？ 今日？ 明日？ ただの風じゃあかんの。春風じゃなきゃあかんのよ……」

咄嗟に出たフォローに、彼女は少し肩をすくめて苦笑した。

うわ、どうしよう。あんまりフォローにならない。救いようのない沈黙があたし達の間に満ちた。

「……全く！ そう悲観的になるのはよしたまえ、レディ！ 大丈夫だ、吹くさ。風が永久に止むなんて、この星が回る事を止めるまで有り得ないだろう。それに……風がないなら吹けばいい話だ。吐息だって風になる。春風も吐息も、命の息吹きに替わりはないだろう？ 吹かないなら僕らで吹かせてやるとも」

——……え？

ポカンとした顔で彼女はエドワードを見ている。あたしも多分、同じ顔をしているだろう。

だって、まさか。さっきまで小学生みたいなケンカをしてたエドワードが。

そのエドワードと言えば、相変わらず拗ねた子供みたいな仏頂面でそっぽを向いている。それでも、かけた言葉の優しさは充分すぎる程理解できた。

「……兄さん、アンタ、意外とええ事ゆうんやねえ。見直したわ」

すん、と鼻をすすり上げて、彼女はエへへと笑った。

つられてあたしも微笑む。

エドワードったら、素敵な事も言えるんじゃないか。さすがは死んでも英国紳士だ。

言っておくがこれは早く君を追いつきたいからだ、勘違いするんじゃないぞ！……とか何とか言ってるくせに、あらぬ方を向いたエドワードの横顔はそんなに険しくない。むしろ険しいフリをするみたいだ。

「……何を笑っているんだい、マリィ？」

「え。——なっ、なんでもない」

毎日こうだと良いのに——……いやごめん、それはそれで気味が悪いわ。

そう思った事は黙ったところ。付け上がられてもへこまれても、どっちも困る。

「おお、そうだ！ 何で忘れていたんだ……！ 口笛だ、マリィ、口笛を吹いてくれないかい？」

「へ、口笛？」

話をいきなり振られて、うっかりどもってしまった。エドワードは気にも留めなかったみたいだけど——何故だろう、ちょっと気恥ずかしい。

「そう。異国の船乗りが昔言っていたんだよ、『風に吹く口笛は風を呼ぶ』ってね」

「そうなんや。知らなかったわ」

「へー……あたしも」

自慢気にふん反り返るエドワードはちょっと癪に障るけど、まあ、良いコト聞いたからよしとしよう。

「……よっしゃー！」

ベランダの手摺に駆け寄り、あたしは遠く霞む空を見た。大きく息を吸い込んで、深く深呼吸をする。少し冷たい空気は、それでも微かな春の香りがする。

よし、口笛が風を呼ぶならいくらでも吹いてやろうじゃない！
この子に早く、お迎えを呼ぼう。

お願いします、神様仏様。今すぐ、北に向かう春風を。
祈りを唇に乗せて、静かに吹く。

細く、高く、長く——呼び声の口笛は、空の彼方に消えた。

「ふ……吹いた、よ？」

「ふむ」

「エドワード、あたしさっぱり、その、風の気配とか分かんないんだけど……？」

「マリイ、靈感や第六感はどちらかと言えば君のオハコじゃないか。僕だってそんなものサッパリさ！」

「——……力いっぱい役立たず宣言ありがとう、エドワード」

「ひ、酷いじゃあないかマリイ……！」

「お嬢ちゃん……ほんま手厳しいなあ」

沈黙の彼方から来る何かは、あたしにも見えない。予感もない。それでもきつと、それは来る。何故だかその確信だけは間違いない気がしていた。だってそうだ。風が止むは筈はない。その通りだ。風が、吹かない筈はない。

「……………あ」

ふわり、と女彼女が手摺に飛び乗った。羽衣が風をはらんだように桜色に揺れる。

「……………来る……………」

「えっ、春風……来たの？ どこ？」

彼女の視線の先を追う。遠いそこは、建ち並ぶ団地。街路樹は見えないから、風が吹いているのか探りようがない。——でも。

「これは、強いのが来るぞ。……マリイ、窓を閉めるんだ」

「あっ、う、うん」

少し緊張感の漂うエドワードの声に、慌て従う。何故なのか、あたしも少し予感がしていた。

「……ほんまに来よった！」

嬉しそうなかん高い声に振り返ろうと——した、瞬間。

「う、わ……ッ！！」

どおん、と。

“家が”揺れた。

何もかもを拐ってくんじやないかって勢いで、突風が吹き抜けた。思わず顔を覆ってしゃがみ込む。

バサバサと髪が舞い上げられる。耳に響くのは強烈な風の音だけ。

や、ヤバい台風中継みたいだコレ。

確かに風は呼んだけどさ——こんな大きいのが来るか普通！

「ちょ……ちよつと！ 何これ！？ 本当に春風っ！？」

必死のあたしに対して、幽霊のエドワードは風なんか素通りだからずるい。気楽なもんだこんちくしょう！

——と、思ったら。

「どっ……どうした事だ！ 僕も吹き飛ばされそうなんだが！？」

幽霊だから掴める物が何もないエドワードが、一番必死そうだった。

「えええ……幽霊のクセに何飛ばされかけてんの、エドワード」

「僕にもサッパリさ！ 取り敢えずマリイ、助けてくれたまえ！」

爽やかに宣誓して、幽霊紳士はなりふり構わずあたしの肩にしがみ着く。と言うか、憑いた。

「ひゃ……！！ エドワードっ憑かないで！ 肩重い！ 気持ち悪い！ ぞわぞわするうつ！」

「ああ、すまないねマリィ。でも、こんな一時の触れ合いもまた良いものだろう？ ふふ、嵐の中寄り添いあって育まれる強固な愛……これぞ吊り橋効果！」

「それなんか違うから！ 大体憑かれようとしてるのに楽しいわけあるかあああ！」

そうこうしている内に、突風はユルユルと収まっていた。思わずホッと息を吐く。

「ほらっもう肩から離れて！ 風止んで来たから！」

「おや、もうかい？ 残念だな」

……完璧に取り憑くつもりだったなこのやろう。

風が収まった事よりも、エドワードを引き剥がす理由ができた事に安心してしまったあたしは人間としてどーなんだろう。自分の危機感の程度があまりにも低い気がして、ちよつとへこむ。

「しかしどうやら、彼女は北に行けたらしいね」
「え？」

エドワードの言葉に辺りを見回すと、確かにあの女の子はキレイさっぱり居なくなっていた。

「ホントだ……」

「別れの挨拶くらいしてゆけば良いものを。全く、最後まで無作法なレディだ！」

大袈裟に肩をすくめたエドワードに、あたしは苦笑いで返すしかなかった。

だって、そうだ。少しとはいえ一緒にいたんだから、お別れくらいしたかったのに。

まあ出逢いが出逢いだったから、忙しない別れがピッタリな気もするけど。

「マリイ、髪に花びらが絡んでいるよ」

「え……あ、ホントだ。あれ？」

一体どこから。

そう思ってお隣を見たあたしとエドワードは、途端に度肝を抜かれた。

——満開の桜。

お隣のまだ蕾だった桜木が、幻のように美しく花開いていたのだ。ひらりひらりと緩やかな風に散るのは桜色。夢みたいだ。夢を見ているんじゃないだろうか。そう思ってしまうくらい、綺麗に咲く隣の桜に、あたしとエドワードは見とれた。

「凄い……」

「ああ」

満開の桜は今は盛りと咲き誇る。

天女のような女の子。春風。満開の桜。そして、北で待っている誰か。

ふと、頭の中で小さくカチリと音を立て、何かが合わさった気がした。

「そつか、あの子」

「なんだい？」

「桜の妖精だったんだよ、きつと」

ベランダに舞い降りた一枚の花びらがスルリと足元を滑ってゆく。

「そつか……そつかも知れないね。だけど、あんなレディでもやるものなのかな」

「ああ、桜？ でもほら、散った花びらって、あの子みたいだよ」

「まあ、確かにね」

指差した先を見て、エドワードはクスリと微笑んだ。地面に走る、小さな花弁たち。まるで風を追いかけてはしゃぐ子供みたいで——そっくりだ、ころころと笑っていたあの子に。

満開の桜を見下ろしながら、あたし達はひとしきり笑った。

「……おや？」

ふと小さく呟くと、エドワードはすいとあたしの摘んだままの花弁に手を伸ばした。

「マリイ、この花弁……何か刻んであるようだよ？」

「え——」

近づいてよくよく見れば、それは確かに文字だった。お世辞にも上手とは言い難い、ミミズののたくったような、へったクソな字だったけど。

「これって」

「あいさつ……のようだね」

覗き込んできたエドワードが小さく、全く、と呟く。
あたしは思わず、笑ってしまった。

「お別れ、しなかったワケじゃなかったんだ」

「そうらしいね……こんな手を込んだ事をするなら、口頭でも良かったじゃないか。変なレディだ」

「まあ、そう言わなくてもいいじゃない」

“ おおきに ”

小さな小さな爪で付けたような跡で、桜の花びらにはそう刻まれていた。

第11楽章：旅は道連れ、世は情け（後編）（後書き）

その後

「あの子、春風に乗ってどこまでいったんだろうね」

「風次第とは言っていたが、それだけじゃあ探しようがないよ、マリイ」

「あ。そう言えば、結局あの子の名前もわかんないまんまなのよね」
「ふむ、そう言えば……」

「あ、おねーちゃん！ エドワードこうしゃく！ さくやひめさま、ちゃんと春風に乗れた？」

「え、さくやひめさまって？」

「あの落ちてきた子だよ」

「姫様とはまた……あれで姫君を名乗るなんて図々しい！ 大体姫とはまさしく僕のマリイのようなも——」

「エドワードうるさいです黙れ」

「……」

「お姉ちゃん達聞かなかったの？ さくやひめさまはお姫さまじゃなくて神さまなんだよ」

「神様！？」

「あれが！？」

「そんなこと言ったらちが当たるんだよ、ふたりとも！」

「だって……」

「ううむ、あれでは……」

「だって言ってたよ、ゆいしよ正しい『やおよろずのかみがみ』のひとりで、えーと……このはなさくやひめ、だったっけ。なんかそんなんだって」

「八百万の神様の一人、ねえ……」

「まをはらう春の神さまっていつてたんだから」

「魔を祓うかあ……あ、もしかして、だから？」

「何がだからなんだい、マリィ？」

「エドワードが吹き飛ばされそうになった事よ」

「……どういう事だい？」

「つまり、あの子は魔を祓うんでしょ。だからエドワードはあの風に祓われかけた。という事はエドワードはやっぱりあくりよ」

「マリィいいいい！！??？」

第12楽章：アン・ドウ・トロワで武者修行（1）

梅雨も過ぎてだいぶたつと言うのに、シトシトと気だるい小雨の降ったあくる日。

たまたま一緒になった学校の帰り道で、唐突に弟は言った。

「お姉ちゃんって、さいきんエドワードこうしゃくと仲良いよね。前はずーっと『じゃけん』にしてたもん」

「……へっ？」

——なん、ですと？

じゃけんって、……“邪険”の事？

思わぬ単語にびっくりし過ぎて思考停止したあたしに、丈は更なる追い討ちをかけてきた。

「やっぱりエドワードこうしゃくっていい幽霊なんだよ。ぼく、お姉ちゃんとかうしゃくが仲良くしてる方がうれしいな」

くるくる傘を回して歩くかわいい弟は、ああ、ニコニコという言葉葉にぴったりの表情で……どうしよう。本気で困るくらい満面の笑みだ。

バックに流れるBGMが雨音なのがピッタリ過ぎてなんだかむなしい。

取り敢えず黙っている訳にもいなくて、あたしは無理矢理の苦笑いで返事をした。

「そ、そーかな」

「そーだよ。だって、おねえちゃんエドワードこうしゃくに怒ってばかりだったもん。あーゆー『りふじん』な事はしちゃいけないだよ」

り——理不尽、ですか。

「そ……そーかな」

「そーだよ。それに塩まくのはイジワルだよ。こうしゃくだって悪いことばかりしてるわけじゃないもん」

うわあ——……だいぶ痛いところを突いてきやがったコイツ。

無垢な言葉ほど容赦がないから手厳しい。しかも最近の小さい子はやたら難しい単語の使い方が上手いから、言いくるめるのも大変だ。

でも、確かに丈の言う通りなのだ。

あたしはエドワードが何かやらかす度に怒ったり、お清めの塩を撒いたりしていた。イヤ、それはエドワードが問題起こすから自業自得だとは思っただけ。

それでもエドワードはいつもそれを笑って受け止める。受け流してるとも言えるか。まあ、たまにヒステリックに泣いてるのはしょうがない。

ともかく、エドワードは凄く寛容なのだ。あたしや家族のする事に関して。

だって御札を貼られようが除霊師と呼ばれようが、エドワードが家族に何かした事は一回もない。

——無自覚で何かしたのをカウントしないなら、だけど。

あれ、でもそれって、客観的に見たら『ワガママで怒りっぽい女の子を温かく見守る優しい紳士の図』に……なる、のか？

そんなまさか！

だってアレはどー見てもストーカー行為だ。一般女子の感覚で言ったら間違いない“しつこい男”ド真ん中だ。て言うか住み込みつてストーカーの域を超えてる。

でも、小学校低学年の男の子から見たらどうなんだろう。まさかイジワルしてるのはあたしの方になるんだろうか。

ドツボにはまった思考が雨音と共にくるくる渦巻き出す。そんなあたしの心情を悟ってか、丈は慌てて言い添えた。

「でもっ、それは前までだったの！ 今は前みたいにエドワードこうしゃくにやな事しないし……」

……あー、間違いない。低学年男子の目線で『わるもの』はあたしだ。

うわー神様仏様、案外ヘコみます。

「でも、今はとっても仲良いよ。そのほうがエドワードこうしゃくだってよろこぶし、ぼくもうれしい。仲良しがいちばんだよ」

「まあ……丈がそう言うなら、なるべくケンカしないようにする、かな」

しゅしゅの（もちろんそう見えないようにした）宣言に、丈は本当に嬉しそうにはしゃいで水溜まりを飛び越した。

「約束だよ！ ゆびきり！」

「え……あ、うん」

指が千切れるんじゃないかってくらい、腕をブンブン振る指切り。しかし“ゆーびきーりげんまん”までしちゃったら、もう姉の立場として約束は守らざるを得ない。

子供の“約束だからね”は絶対だ。それこそ大人がしてくれた約束なんてものは、ホントのホントに絶対なのだ。あたしは大人じゃないけどお姉さんだし高校生だから、丈は絶対裏切らないと思うてるだろう。

ましてや、丈はあたしより、ドワードの味方だ。
うっ……困った事になってしまった。

唯一の救いと言えばエドワードがこの場に居ない事だけ。丈がバラしたらなんの意味もない、ペラッペラの障子紙並みの防波堤だ。
口止めは——無理だな。絶対。

ああちくしょう泣けてくるんですけど自業自得ですか、神様仏様！

「……お、お姉ちゃん」
「へ？」

気が付けば、大分後ろで丈が立ち止まっていた。

「なにやってんの？」

「だって、なんか、家の前、変な人が……」

あたし達の向かう先を指差したまま丈は立ち尽くしている。その表情が酷く固い事にあたしはやっと気が付いた。

「何……」

振り返ってそれを目にした瞬間。
あたしは言葉を失った。

「おや、こんにちは。久しぶりだね——茉莉ちゃん」

築十五年の我が家の前。

真っ黒な蝙蝠傘を差した銀縁眼鏡で着物の男が、ちょっと真似で
きなくらい爽やかな笑顔で片手を挙げた。

思わず傘を取り落としたのは言うまでもない。

「知り合いの人？」

「……とつても不本意だけど、そうだね」

「え？」

すつごく久しぶりのそのツラ。

それでも忘れるわけがない。忘れるもんか。

この、腹が煮えくり返るくらいの韓流スター顔を！

あたしはケンカでも仕掛けに行く勢いで除霊師・那智に詰め寄っ
た。

「こんにちはっ。お久しぶりですね那智さん何の用ですかっ」

「うん、刺々しい事この上ない挨拶ありがとう。ついでだけど、笑
いたくないなら無理に笑わなくていいよ？ 顔引きつつてるから」

……さりと人の気遣いをぶち壊しやがってこの……！

猫かぶりの除霊師は、湿気なんてどこ吹く風の爽やかな営業スマ
イルだ。

暴力主義はいけない。けど、ああ、コイツの事だけは本当に張り倒してやりたい。

取り敢えずお言葉に甘えて、無理して笑うのはやめた。

「……あたしは質問したんです、答えて下さい。何してるんですか？　ひとの家の前で」

「やだなあ、茉莉ちゃん僕が前に言った事忘れたの？」
「忘れた……？」

アンタの事は存在すら忘れてたけど、何をされたかは忘れちゃいないんだからな、このやろう！

しかし当の除霊師が言いたかったのはそんな事とは関わりなかったらしい。ヤレヤレと言うように首を振って、彼は着物のふところから“それ”を取り出した。

「僕は『いずれまた』と言ったんだ。それとこれ、見覚えあるよね」
「……………あ」

ペラリと突き出されたそれに、見覚えは——もちろんある。

「お、おふ、だ、ですねえ……」
「そうだね。ご丁寧にも誰かさんが元の札をそっくり模写してくれた御札だね」
「……………」

——ちっ。やっぱりバレたか。まあ、書いたのは彼本人なんだから、そりゃバレるよね。

ニコニコと顔だけは無害に微笑ませて、除霊師・ナチはすつと滑るように腰を屈め、あたしの顔を覗き込んだ。

降り続ける雨が二つの傘に遮られ、曇り空より濃い影が目前に落ちる。影の中、光る銀縁のフレームだけが不気味に明るい。

何顔なんか近付けてんの……とは言い難い威圧感に、思わず息を飲んだ。雰囲気圧倒されてか、後ろにいる丈すら立ち竦んだままだ。

「茉莉ちゃん。君は『見えるタチ』の割りに、こういう事に極端に疎い。『周りに隠して過ごしている』からそうなってしまったんだろうけど——非常に危うい事をするね、君は」

「なっ……何が、ですか——」

「コレの意味を知らないのか、と言ったんだ」

ペラリ、と目の前に突き出されたのは、あたしの書いた嘘っぱちの御札。

何の力もない、エドワードさえ防げない、ただの紙っ切れ——の、筈だ。筈なのに。何を言うんだコイツは。

さっぱり飲み込めないあたしに、ナチはさも当然かと言わんばかりの溜め息を吐いた。

「そもそも何故、御札に退魔の法力が宿ると思う？」

「たいまのほうりき——退魔の、法力？」

唐突な呪文じみたセリフに思考が一步ばかり止まってしまった。

「……知らないのか」

「知りません」

「だろうね、女子高生だし」

今コイツ全国的女子高生相手にものすごく失礼ぶっこいたよな。しかし淡々と進む話に、あたしはつつこむタイミングを逃してしまった。

「御札はね、清めの塩や御酒の『浄化』、御守りや破魔矢の『加護』とは違って、それ単体に『力』はないんだよ」

「……え」

「アレは本来『挑戦状』や『果たし状』の類いだ。要はそれを使う者の力の媒介、相手への脅しと牽制。そう言ったところかな」

聞き慣れない単語にうまく思考が着いていかないんだけど——だけれど、つまりそれは。

トンでもなく、まずい事をしていたと、そう言う事？

それに思い至った瞬間、サアツと頭から血の気が引いた。待って。

それって、ちょっと、あたしが書いたんだから——。

「あた、あたしから、まわりの幽霊にケンカ売った事になるの……！？」

「……明察」

ナチは屈めていた腰をすっと伸ばした。重なっていた傘が離れ、思い出したようにパラパラと雨の弾ける音が耳元に響く。視界に降りていた影はもうない筈なのに、むしろ辺りの暗さが増した気さえする。

背後でゴクリと喉の鳴る音がした。丈も話の意味と危うさに気付いたのだ。

除霊師は相変わらず笑っている。

「馬鹿な事をしたね……なまじ力があるのも考え物だ」

笑みを形作る口元とは対照的に口調は冷やかだ。当然だろう。だってあたし、トンでもない事を——ん？

「あ、れ？ ……あの、あたしあなたが家に来た後一回も、悪霊とか幽霊とかで問題があった事ないんですけど……？」

そうだよ。そうだよ。自問自答の解答はそれだけだ。

だって実際、エドワード以外には全く絡まれもしていない。あ、桜の神様らしき子が来た事はあったつけ。でもアレは別に問題らしい問題には発展しなかった。ご近所さんの桜が五秒で満開になっただけで……まあ、居座られた事は迷惑っちゃあ迷惑だったけど。

傘の影からそーっと除霊師を覗き見る。

猫かぶりの除霊師ナチは、やっぱり笑っていた。……微妙にム力つく。

「そりゃあそうだろうね。エドワード卿の強い怨ね……じゃない、加護が君の家を囲んでいるんだ。その力の方が君の力より『何倍も』強い。寄って来たくてもこれは無理だね」

「ちょ、今『おんねん』って……」

「言葉のあやだよ。気にしない気にしない」

キッパリ言い切られてもはいそうですかで流せるかそんな物騒な単語。

しかし再びこちらに視線を向けたナチからは笑みが引いていて、とてもツツコミを入れられる顔ではなかった。美形はだからイヤなんだ。無表情がふつーの人の三倍は怖い。

「とにかくだ。君は守って貰っているから無事にすんでいるだけで、少々危なっかし過ぎる。いつか家族や周りを巻き込む事にもなりかねない危険因子だ」

「……キケンって……」

そんな、人を時限爆弾みたいな言い方しなくたって。

けど実際にその可能性はなきにしもあらずだから、あたしに反論の余地はない。

実際、以前はそうだった。怪我や病気がなかっただけで、怖い目にあったのは一度や二度ではなくて。

ふと、この人は案外、そんな事を見越して気にしてくれているのかなと思った。だってこんな横暴人間でも色々見えてる訳だし、それで苦労もした筈だ。きっと職業柄、あたしなんか比じゃないくらい色々。

そう考えたら、なんだか余計いたたまれない気持ちになってきた。うつ……軽率な行動はするもんじゃない。

「そこでだ——修行、してみないかい？」

沈黙は三拍。

停止した思考が動き出した、その瞬間。

「……………はああっ!？」

思いの外デカい声がお腹の底からこぼれでて、心底恥ずかしい思いに襲われる。

いやいやいや。そうじゃない恥ずかしがってる場合じゃない!

「なんですか修行って——!？」

「ご両親の了解はたぶんすぐに得られるよ。お母様にはお話してあるから…………じゃあ、またね」

好き勝手に話を終わらせて、猫かぶりの笑みを浮かべた除霊師はさつさと帰って行った。まじで、帰って行った。

ポカンと口を開けて取り残されたのはあたしと、後ろで怯えていた丈。

な、何だったんだ——今のは?

相変わらず降り続ける雨の下、あたし達は家に入る事も忘れて玄関前に突っ立っていた。

「お…………おねえ、ちゃん、どういうこと? しゅぎょうって?」

「ゴメン、何が何だか、あたしにもさっぱり…………」

ただ何となく嫌な予感はある。物凄くする。

せつかくの夏休みが始まるのに、どうしてだろう、もんつのすごく嫌な予感。

どうやらあたしは幽霊でもないクセに、あの除霊師とはすごぶる相性悪いらしい。

——あ。

幽霊と言えば、エドワードを忘れてたけど大丈夫だったんだろうか。あたしのいない時に何かしてないよね。

「お帰り、僕のマリイ！　おや？　ジョーと二人してどうしたんだい。そんな所で」

まるでタイミングを見計らったかのように、ドアからヒョコツつとエドワードの首が飛び出した。

「わあ、こうしゃく！」

「エドワード！」

拍子抜けするくらい無事だよコイツ……心配して損した。

首だけエドワードに丈がよろこんでバタバタと駆け寄ってゆく。どうやら少しは混乱が収まったらしい。まだちよつと、表情は固い。そうだ、丈はあの除霊師が以前何をしたのか知らないのだ。それなのにただ怖い思いだけをさせて、ヤな巻き込み方をしちゃったかも知れない——そう思ったら、心の奥がちよつと痛んだ。

そして、その日の夜。

あたしの物凄く嫌な予感、ものの見事に的中したのだ。

第12楽章：アン・ドウ・トロワで武者修行（2）

夕食後、自分の部屋に戻ったあたしが取り敢えず一番始めにしたのは、まくらにラリアットをかます事だった。

まさかのリングと化したベッドの上。エドワードが天井で変な悲鳴を上げた。

「あんツの野郎……次に会ったら絶対、シメてやる……！！」

「ま……マリイ、落ち着きたまえ、レディがそんな物騒な事を言うものじゃない。それに君のガラス細工のような白い腕は、小鳥を愛でるようなたおやかな仕草こそ似あ——」

「うるさい黙れ」

そんな何故だいたい酷いじゃないか、僕は君の手が好きだと言っただけなのに何故こんな仕打ちを——！？

とかなんとか悲痛に叫びながら、エドワードは手にしていたティーカップ（幽霊専用）を取り落とす。落っこちたティーカップはお気に入りのラグの上でガシャンと割れる——事はなく、スルツと何処かへ消え失せた。

ああ、あれも幽霊みたいなものなのか……と場違いな感心をしている側で、エドワードはメソメソ嘆き続けている。またしても、垂直の壁に突っ伏して。

こっちが泣きたいくらいだくしょう。

しかし先に泣かれると何故なのか、泣く気がさっぱり失せてしまった。

「エドワード」

「……なんだい、マリイ」

「あの陰険強欲眼鏡の除霊師が来たのはあなたがポルターガイスト
紛いの事を立て続けに何回もしたからです」

「それは……申し訳ない。確かに、僕のせい……かと……いや、そ
うだね……」

ズバツと言ってやったら思いの外ダメージを与えられたらしかっ
た。メソメソがモゴモゴに取って変わる。

エドワードは立場が悪くなっても反論できないタイプだ。
本人には悪いけど扱いやすい。最近そう気付いた。

「ですよ。そーですよ。だってあなたがそんな事しなければあ
の人は来なかった訳ですし………あの、あの、意味不明除霊師は
……！」

「ま、マリイ……」

抱え込んだまくらがギリギリと悲鳴を上げる。あーダメだ。物に
当たってもどうしようもないのに。

ごめんよ、あたしの愛しい羽枕。

無駄に強い腕力のせいで、柔らかな羽枕は見事にブツ潰れている。
思ったより力入れすぎた。人間だったら才ちてたな、これ……。

そんな殺人級の馬鹿力を無意識に発揮できるほどあたしが怒って
いる原因は、そう。

あの除霊師、なちきよたか那智清隆ことナチズムの化身。

ニヤンニヤン猫かぶり男。

爽やか嫌みな韓流ヅラ。

今なら奴に関する酷いあだ名くらい楽に思い付けそうだ。なんだ

ってあたしはモーレッツに怒っている。ああそうだ、本当に怒ってるんだからな那智め……！

「マリイ、あの、冷静になろう。顔が恐ろしい事になっているから……ね？」

エドワードにすらドン引きされるって、どんな顔してんだあたしでも今はそんなのかまってるられないくらい頭が沸騰しているのだ。

——だって。

「ムリ！ 冷静になんかなれない！ なんなの『お寺でバイト』って！？ 絶対『修行』させる気だろ！ なんでせつかくの夏休みに！？ なんで一週間も！？ あーッもう意味分かんねーよこんちくしょう！！」

叫んだら息が切れた。

ゼーハーと肩で息をしながら、それでも全く怒りが収まらない。あああ、もうっ！

エドワードは完全にビビったらしく、天井の隅から頭を半分だけ垂らしてあたしを見ている。

「大体何よ、アイツあんな卑怯な手でお母さんを買収して……！ 『綺麗なお母さまとお茶まで一緒にさせて頂けるなんて幸せです』ってどのクチでお母さんに言ったの、どのクチでーっ！」

そうなのだ。

あのナチはよりもよっってお母さんを味方に付けた。

御札の処分のもと、何故かアイツはお茶とおやつをご馳走になり、その席でお母さんにこう提案したらしいのだ。

良かったら夏休み、娘さんにアルバイトを頼みたいのだけれどいかがでしょうか——と。

奴は口が上手い。すごぶる上手い。

少し遠いけれど旅行気分で楽しめる楽なお手伝いだとか、弟も一緒に来てくれたら夏休みの自由研究になるとか。挙げ句頼める人にはことごとく断られて、もう私以外にはあまりあてがない……等々泣き落としてまで絡めてきたらしい。

もちろんイケメンに弱いお母さんはあっさりと良いですよの二つ返事。

お陰でナチの不吉なお誘い通り、両親にはアルバイトの名目で、奴の職場で“修行”をする事になってしまったらしいのだ。

……どうでもいいけど“修行”ってあたしは少年漫画かなんかのヒーローか。天下一武●会なんぞ目指しちゃいない女子高生にオススメするような事だろうか、修行。

「マリイ、ご婦人方とはにかく、若く瑞々しい青少年が好きなのだよ……見ているだけでも楽しいのだ。彼はそれを上手く使う術を知っている。残念ながら母君はもう奴の味方だ、諦めたまえ」
「諦められるか！」

アルバイト——もとい修行なんて何させられるか！

相手はなんせ、除霊師だ。霊媒師や霊能者や陰陽師と何が違うのかはさっぱりだけど、ハッキリしている事が確実にひとつある。

間違いなく“靈感関係”で何かさせられる、という事だ。

冗談じゃない。

まっぴらゴメンだ。

今まで必死で避けて避けて避けまくってきた事を、何で今さら。

しかし事態はもうトントン拍子に進んでいる。どうやら奴の根回しは予想以上のものらしい。

リビングで“那智清隆”の名前を出した途端、『ごめんね茉莉、お断りするのは可哀想だったのよ』。だからお願いね』と新幹線のチケットを渡された時点である程度分かっていたけども。

こんちくしょう何もかもアイツの思い通りか！

「あんなタチの悪い性格してる癖に外ヅラは完璧って詐欺師じゃない！ 大体、ああいう芸能人顔って大っ嫌いなのに。何でアイツが霊能者なの？ 何で芸能人じゃないの？ そしたら絶対、一生関わる事もなく、あたしは平和に暮らせたってのに。ああもう腹立つ……ッ！」

「ま、マリイ……怒る方向性がズレているのではないのかな？」

ツッコまれなくても知ってます。

でも今は、何が何でもアイツを罵倒してやりたい。そうでもしなきゃ収まらない。

「あんな奴！ 他人の事なんか大して気にもしてないクセに『危うい』とか何なの、ほっときゃ良いじゃない！ ——……あたしは、今までとおんなじの……今まで通りがいいのに……」

そう——そんな事、したくない。

靈感を、もしかしたら強くしてしまうような事なんて。

見えるだけのこの力を今更どうこうしたくない。今よりこれを手く扱えるようになって、ならなくておおいに結構だ。

今までと同じ、何も見えないフツの人のフリじゃいけないんだろうか。

——いけなかったのか。

思わず深いため息が出た。降り続く雨の音にため息は絡み付いて、陰鬱に部屋に溶けていく。

夏はもうすぐだ。なのに妙に肌寒くて、ベッドからタオルケットを引っ張って頭から被る。季節外れの雪だるまみたいな格好で、あたしはさっきの怒りが嘘のように落ち込んでいた。

「……マリイ」

ふとエドワードがスルリと天井をすり抜けて降りてきた。空中に腰掛けるような体勢で、あたしの顔を覗き込む。

バックに花でも散らしたくなるような美貌の幽霊紳士は、相変わらず反対側が透けて見えて、今日はどことなく雨雲色をしている。ちよっと困ったように眉を下げてエドワードは微笑んだ。

「自分で自分の身を守るようには、なりたくないのかい？」

「……え」

「修行なんて言えばなんだか堅苦しいけれどね。でもマリイ、君自身の力をつまく扱えるようにと、そういう事なんだろう？ それならば今まで通りと何も変わらない生活を、もっと楽に送れるのではないかな？」

透き通った青い瞳を細めて、エドワードはふわりと舞い上がる。

「魑魅魍魎共を自分で近付けないよう対処できるようになれば、ほら！　今までより更に普通の生活が何の障害もなく送れるじゃないか」

「そう……だけど」

「ジョーだって守ってやれる。シックスセンスを世のため人のために……そう、君は現代の聖女にだってなれるじゃないか！」

どこぞの劇団員のようにバツと両手を広げて高らかに幽霊紳士は宣言した。オマケとばかりにこっちにウイंक。良い事言ったつもりらしい。

まあうん、聖女がどうかは置いといて。

確かに身を守る術はあった方がいい。そうかも知れないけどさ。――けど、なんか、おかしい。

「……エドワード、今日はやたらナチさんの意見の肩持っね」

――ギクッ。

そんな効果音が付きそうな顔でエドワードは固まった。

……やっぱりか。なんか怪しいと思ったが。

「おい答える。お前もあの陰険強欲眼鏡に買収されたのか」

「買収だなんて、マリイ、死んでも英国紳士たる僕がそんな事を――」

「塩まくぞ」

「……………」

うつたえてる。

分かりやすくうつたえてる。

思いつきり肩の力が抜けた。

よくよく考えてみれば、除霊師のナチが家に来たというのに幽霊のエドワードはケロッツとしていた。嫌味や憤慨のひとつもなし。

実に、不審だ。

「マリイ、良く聞くんた。僕は決して買収に応じた訳ではなく——」
「じゃあ何に応じたんだコラ」

「最後まで聞きたまえ！ あのナチが母君との会話で言っていたのだ！ 自分の出身は霊山近くで、その山を奉る社に参拝に行くと『悪縁』や『悪運』、果ては『呪詛』や『産まれついで凶事』すら断ち切る事が出来るといふ言い伝えがあるのだとおお！」

振り被った塩まきフォームにビビりながらも、エドワードは一気にまくし立てた。長ったらしいセリフに、あたしは思わず停止する。

そんなにまとめて言われると意味を噛み砕くのに時間かかるじゃない。

しかしつまり、それってこう言う事か。

寄って来る悪霊やらなんやら、まとめて神様の力でどうにかしてくれる——……と言う事？

今の今まで、なーんにもしてくれなかった神様が、都合よく？

「……………ウソくさ」

開口一番の不信心発言に、エドワードはガツクリ肩を落とした。

「マリイ…… 良いじゃないか、少しくらい信じてみたって」
「信じるだけで救われるなら苦労しないでしょうが」

雪だるまスタイルでやさぐれた発言をしても格好はつかない。むしろ拗ねた子供みたいになっているのではないだろうか、今の自分。そんな心の内を知ってか知らずか、エドワードはオロオロとあたしの気を引く事に必死になっている。

「まあ…… つまりその…… とにかくだ！ マリイ、僕は不安なのだよ。霊感の強い君がこのまま何事もなく暮らしていけるのか、これから僕の守護だけで足りるのか。実際、今までも悪霊に遭った事はあるんだろう？僕は君と出会ってからはそのままで強烈な者にお目にかかった事はないが、長い人生この先もそうとは限らない」

「それは確かに、そうだろうけど」

「守護霊たる僕の力がどこまで通用するのも分からない。それだつて不安だ。君も分かってくれるね？」

「…… うん、それは、まあ」

断っておくが、あたしはこの幽霊紳士を守護霊にした覚えはない——が、話がややこしくなるので黙っておいた。今後面倒な事にならないように訂正しとく必要はありそうだけど。

「ナチのようになれるまで修行しろなんて事は言わない。でもきつとする事に損はない筈なんだ、マリイ…… お願いだ、行ってくれないか」

あたしと同じ目線まで降りてきたエドワードは、隙のないモーニングスーツには全く似合わない姿勢を取った。

英国紳士ならばきつと、一生とる事はないであろう姿勢を。

……と言つか、生でそれをしている人なんか、あたしだって初めて見た。

深々と両手を揃えた、ジャパニーズのモストオブお詫びスタイル。そう、土下座。

「え、エ……え、えエドワードッ？」

ギョツとした。

今までになく狼狽するあたしの目前で下げられた頭は動かない。

「な、なんて事してるの頭上げてよ、ほら！ 死んでも英国紳士でしょ？ 紳士はそんな事しないからっ」

「すまないが、マリイが行くと言わない限り僕はこのままだ」

な、なんだそれ！？

妙な気迫を滲ませながら、エドワードは頑として頭を上げない。

こ……これは、困る。気まずい。いつもボケボケ小春日和な奴にこんな真面目な事をされると、本当に気まずい。

しかも部屋のだ真ん中にモーニングスーツで土下座の幽霊って。オブジェと思うにもインパクトがありすぎる。

これは放って置けない。放って置いて眠れるわけない！

「え、エドワード」

「……」

「エドワードさん」

「……」

「頭上げてよ、エドワード」

「……」

無言の断固拒否。

エドワードのくせに今回ばかりは本当にタチが悪い。

「エドワードお……」

ちよつと困つたように呼び掛けても無視。なんてこつた。エドワード、お亡くなりになって百年は経つのに、まさか今頃反抗期？
んなわけない。

「もう……！ そんなにされても、あたし行きたくないからね！」

立ち上がってそう脅しをかけてみても、やっぱり無視。

なんだか見ていられなくなって、あたしは土下座のエドワードを残したまま逃げるように部屋を出た。

なんなの。——変だよ、エドワード。

階段を勢い良く駆け降りる。とととと。その歩調と一緒に妙な不安が加速していく。

美形でキザで臭いセリフはお手の物で、そのくせストーカーで思い込みが激しくて変態で、しかもちよつとスケベで、そのくせ妙なところで自信満々で——でも、意外にいいヤツ。

それが幽霊紳士・エドワードだ。

だからなのか。この、違和感は。

何だろう、この、不安。

おかしい。そうは思うのに、そのおかしさのはつきりした正体が掴めない。

自称“守護霊”のエドワードが“自分の力で何とかする事”を進めてくるから？

それともライバルと勝手に思っているらしい除霊師ナチに突っ掛からないから？

それとも——おふざけを交えずに、あたしの靈感についてエドワードが忠告してきたのが、初めてだから？

階段の一番下の段であたしはしゃがみ込んだ。

しとしと、雨音は部屋中に染み渡る。薄ら寒くて知らず腕を組み、温かさを逃がさないような体勢になっていた。

「何なの……」

そう呟いても、誰も返事なんかしてはくれない。いつもならこんな独り言だって、間髪入れずにエドワードからの返事があるのに。そのエドワードは相変わらず部屋から出てこない。土下座したままの姿がフツと頭に浮かんで、なんとも言えない気持ちになった。

この件に関しては突っぱねている自分が一番子供だって事くらい、分かってはいるのだ。

けれど——いやだ。見えるとか、見えないとか、黙っていたら分からない事、黙っていたらだめなの？

過ぎる記憶はいつの物だろうか。

しとしと思ひ出に雨音が重なって。

ああ、だからあたしは雨が苦手なのに。

『茉莉ちゃんが、見たせいじゃない……茉莉ちゃんのせいじゃない』

！
」

幼かったあたしは、違う、なんて言葉も言えなかった。
投げ出された傘があの子との間に果てしない壁のように転がって
そしてあたしは遠ざかる背中を呆然と見つめたまま、いつまでも
雨の中に立ち尽くす。

違う、そんなはず無いって。信じてくれるって、思ってたのに。
そうして、あの雨の中で、あたしは――。

「わあ、お姉ちゃん！？」

いきなりの大きな声に驚いて顔を上げると、ダイニングのドアか
ら丈が覗いていた。目が合うと心配そうな顔をして、ドタバタとあ
たしの前まで駆けてくる。何故か両手にドーナツを持っていた。

夕食の後だったのに……おやつにしては量が多いんじゃないの。
育ち盛りの食欲って怖い。

「どうしたの？ おなか痛いなの？」

「え、いや、お腹は痛くないから大丈夫」

「でも、おなか押さえてるのに……」

そう言えばしゃがみ込んだままで腕組みしていたんだった。勘違
いされる体勢だ。

「違う違う！ 寒かったから」

慌て腕をといて立ち上がるも、向けられるのは疑いの眼。
なんか、最近ちょっと扱いづらくなってきたな弟よ……。

「なんかお姉ちゃん、変だよ」

「変ってそんな……ダメでしょ、そんな失礼な事言ったら。お姉ちゃん一応女の子なんですけど」

「だって変なんだもん」

むー、とむくれながらも丈はマジマジと見詰めてくる。

たつぷり十秒はにらみ合っただろうか。

急にアツと目を見開いて、丈はビシリとあたしの顔面を指差した。

「『こうしゃく』とケンカしたんでしょ!？」

「へっ!？」

思わずたじろいだ。

お、恐るべし小学生の推理力。コイツ特に勘だけは良いからバカにできない。

やっぱりそうなんだ、と言わんばかりの表情を浮かべたその顔は、
どんどん赤く染まっていく。

ああ……これはアレだ。怒らせちゃったか。

「もお! ケンカしないって今日約束したばかりでしょー!？」

「けっ、ケンカじゃない! ケンカはしてないっ」

「じゃあどうしたの? また“こうしゃくが嫌がること”したの?」

「嫌がる事はむしろあたしがされてるんだけど……」

「お姉ちゃんのは逆ギレ!」

逆ギレた覚えはないのに段々とあたしの立場は悪くなる。

しかし……丈は本っ当にエドワードの味方なのね。今更だけどあたしの人生って四面楚歌。

「とにかく……ケンカはしてないよ。ただちょっと意見の食い違いがあって……エドワードが困った事するからここに居たの」

「困ったこと？ なあに？」

さすがに言うのに気が引けた。けれど言い渋っていたら余計に話がねじれそうだ。

小学生の弟に不用意な衝撃を与えませんよーに、と祈りながら、あたしはぼそりと答えた。

「えーっと………ど、土下座？」

言った途端、当然と言うかなんと言うか。丈は今まで見た事もないような衝撃的な表情を浮かべてのけぞった。

そしてまたしてもビシリと人の顔面を指差してひとこと。

「鬼嫁！！」

どっから覚えて来たそんなセリフ！？

ていうかあたしはエドワードの嫁じゃねえ！

つつこむべき言葉はいつぱいあったのに。こっちもビックリし過ぎて頭が真っ白だったもんだから、結局何か言うより先に丈が矢継ぎ早に叫んでいた。

「怖いよ！ おねえちゃん幽霊きらいだからケンカしてばっかりなのはしょうがないけど、そんなことさせちゃダメ！ 悪女になるん

だよ!？」

「悪女でも鬼嫁でもないしさせてないわ土下座なんか!」

やっとこさつつこめた言葉がそれではなんの威力もない。

丈は相変わらずの驚愕ヅラで、あたしの言葉なんかちつとも届いていないようだ。

ああもうちくしょうエドワード、お前の土下座が姉弟不仲の原因になったら呪ってやるからな!

——しかし悪い事はどうやら重なりまくるようで。

「茉莉、丈? アンタ達、そんなところで土下座だの鬼嫁だの……何騒いでるの」

背後から聞こえた声に、あたしと丈は仲良く固まった。

「お、母さん……」

洗面所からぬうつと顔を覗かせていたのは、キュウリの妖怪のような顔面になった——つまりキュウリパックを顔中に施した、お母さんだった。

なんとも言えないビミョーな空気。

ギクシヤクと、あたしと丈は階段に足をかける。

「そ、そろそろ部屋に戻ろっかなあ、ねえ、丈?」

「そ、そうだねーっ、お姉ちゃん!」

ああ、酷い。なんだこの姉弟そろって演技力の無さは。背中に感じるじつとりとした重たい視線が辛い。

お母さんはポツリと一言、

「お母さん、鬼嫁じゃないし、お父さんに土下座させた事もないわよ」

とだけ脅しをかけて洗面所に戻って行った。

階段を急いで静かに上ったあたしと丈は、転がり込むようにしてあたしの部屋に駆け込んだ。

——あ、焦った。久しぶりに本気で。

なんせあたしも丈も、自分の靈感の事、ましてや家に居るもうひとりの住人の事など両親には話していないのだ。

でも、あれ？

お母さんの悪口言ってたなんて思われた方が不味いような。

「うわあ……どうしよう、お手伝い増やされるかも……」

「でも、おねえちゃんが鬼嫁だなんてお母さんにバレなくてよかったね！」

「だから鬼嫁じゃねえよ」

ズレた言葉に呆れた返事をして、しかしそこであたし達はまた固まった。

忘れてた——この部屋はあたしの部屋で。

つまり、この部屋の中央を今占拠している物体は。

「こ、こうしゃッ……！！んーッ、むー！！」

「iiiiiiiiっ静かにしてえええ！」

極限まで声を抑えて叫ぶという器用な芸当を、あたしはこの時初

めてした。

丈がくぐもった声を出したのはもちろんあたしが口を押さえたからだ。目を白黒させながら丈はエドワードとあたしを交互に見ている。

「叫んじゃダメ！ 絶対ダメ！ 分かった？ ……分かった!？」
「……! ……!！」

相当苦しいのだろう。必死に頷いてギブアップの姿勢を取っている。

押さえていた手を放すと本気でむせたようで、丈はしばらくフロリングの上をのたうち回っていた。

「お……うゴホッ、おねえちゃん、やっぱり、おによめ……」
「違うつて言つてんでしょ！」
「だって、こうしゃく……」

見ればエドワードはこの騒ぎを前にしても、本当に宣言通り全くそのままだった。下げた頭は決して上げず、その場から一ミリだつて動いてはいない。

ああ、何て言うかも……ここまで来るとあっぱれですね、エドワード。

この男がこんな頑固者だとは知らなかった。目の前で何が起つても本気で動く気はないようだ。

「エドワード聞いてるでしょ。お願いだから、頭上げて。あたしいんな勘違いされて困ってるんですけど」

「……」
「……もっっ！」

はあつと盛大にため息を吐くと、ちよつと涙目の丈がキョトンとあたしの顔を振り仰いだ。

「お姉ちゃんがさせたんじゃないの？」

「だから違つたら。あたしはエドワードに土下座は止めてつて言つてるの。でもコイツ全然聞かないんだから」

「へー……」

会話は聞いているはずなのに、やっぱりエドワードは置物のようにピクリとも動かない。そんな姿をまじまじと見つめて、ふと、丈は彼の前にしゃがみこんだ。

「こつしゃく、どうして土下座やめないの？」

素朴な疑問だったのだろう、まだ小さい丈の問い掛けに、どきりと鼓動が乱れる。

あたしの靈感——いや、この子が“見える質”だと分かればきつとナチは“あたし達の靈感”をどうにかしようとするだろう。

なまじ力があるのも考え物と評されたあたしと同等に、丈も『見えない物が見えている』のだ。

見える力を上手く、扱えるようになるための。

修行とはきつとそう言う事。

けれどそれで、何が、どんな風に変わってしまったのだろうか。

見えないフリを、聞こえないフリをして、最大限に回避してきた“その世界”。

丈は、どうしたいんだろう。

そう思っているのに——あたしは自分自身のために、その選択肢を隠している。

エドワードは頭を下げたまま、そつと答えた。

「……マリィと、君のためだよ。ジョー」

「おねえちゃんとぼく？」

「そうさ。ジョー、そう言えば聞いた事がなかったが——君は、自分が幽霊を見る事ができるその力を、どう思う？」

——何を。

思わぬエドワードの問い掛けにあたしは思わず静止の言葉を言いかけて、グツと、それを飲み込んだ。

何故、止めようなんて考えたのか。

答えなんて決まっている。

垣間見えた自分の浅ましさに、乱れたままの胸の奥が荒れた海のようにざわめいた。

「どう、って……」

「ジョー、簡単で良いんだ。どう思う？」

丈は一度、チラリと振り返った。

あたしは堪らなくて目を反らしてしまったから、どんな顔をしていたのかは分からない。

そしてまた丈はエドワードに向き直った。

「ぼくは——よかったなーって思うよ」

ケロッとした、いつもと同じ調子の声。
いつも通りの、明るい声。

急に、何かの膜が取り払われたかのように、薄暗かった視界が明るくなった。

「やな事もあるんだけどね、でも、やな事だけじゃないよ。お姉ちゃんだって同じの見えるんだもん。それにこれからぼく達と同じで、幽霊の見える友達もできるかもしれないでしょ？ 見えるのがずーっと、ぼく一人だったらこわかったかもしれないけど、こうしゃくもお姉ちゃんもいるし、楽しいからいいんだ」

えへへ、と後ろ姿の丈は笑った。

その時、その笑い声を聞いた途端、どうしてか視界が揺れた。雨の日のガラス窓みたいに視界が曇る。あ、マズイ、泣きかけるとやつと気付いて、あたしは丈が振り向く前にと大慌てで目蓋をぬぐった。

すっきりした視界の中でエドワードはまだ土下座をしていて、丈もその前にしゃがみこんだまま。

けれどその光景を見ても、今は鬱陶しいなんて思わなかった。思えなかった。

「……マリイ」
「何」

エドワードの優しい声に、あたしの返事は情けなく震えている。それでも何とか、いつも通りのふてぶてしいあたしの声だ。

「以上がジョーの意見だが——君は、どうだい？」

いつもと何も変わらないエドワードの気取った質問は、ただと土下座をしたままだから台無しだ。

「教えない」

「ちょ……そこは『わたしもよ、エドワード』と来るのが定石じゃあないのかいマリイ!？」

「あ、頭」

「え、あ」

叫んだ弾みだったのだろう。YESを聞くまで頭は上げない宣言をしたはずの幽霊紳士は、思いつきり頭を上げてしまっている。

あんぐりと口を開けたエドワードはしばらくの間、目の前の丈と見つめ合い——そしてまた、ゆっくりと頭を下げた。

「いやいやいや、今更遅いから」

「い……今のは単純な間違いだ、ケアレスミスだ。よってまた元に戻る。だが全く気にしないでくれたまえ!」

——こんなにかつこ悪い言い訳久しぶりに聞いたわ。

あたしはまたしてもため息を吐く。まあでも、それがエドワードだから仕方ない。

笑いそうになる口元を何とか引き締めて、あからさまな咳払いを試してみた。

「いいよもう土下座しなくて」

「いや、しかしだねマリイ、紳士たる者一度口にした事を——」

「だから！ 行く事にしたからもう頭上げてもいいって言ってるの！」

察してくれない貴族様のために全部言っやって、それでやつとエドワードは頭を上げた。

雨雲色に透けたの幽霊紳士は、死神すら騙せるくらい煌めいた満面の笑み。

今この場の誰よりも、エドワードは嬉しそうだ。

「本当だねマリイ！？ 嬉しいよ、君に僕の言葉は必ず届くものと信じていたからこの喜びはなおさらだとも！ ジョー、君も覚えておくといい。これこそが試練を乗り越える、まさに愛しあう二人の共同さ——」

「変な事教えないでくれます？」

「きょーどー？」

「忘れなさい。使っちゃダメそんな言葉」

「……マリイ、そこらへんには相変わらず、シビアなのだね……」

しょんぼりと萎れたエドワードは無視する。

お姉ちゃんやっぱり意地悪、なんて言葉もこの際聞かない事にしよう。

丈の言葉もあつたとはいえ、今回はお清めの塩だつて我慢したんだから。

「そう言えばお姉ちゃん、行かつてドコに？」

「嫌味な除霊師のいる遠くのお寺にアルバイト……ううん、修行しに」

「しゅぎょー？ ってあの変なお兄さんが言ってた事！？ いつ？ どこ？」

「慌てなくてもまだ先よ、夏休みだから。でも丈も一緒に行かなき

やいけないんだけどね。新幹線のチケットふたり分貰っちゃったから」

「本当!?!」

「本当」

「やったあ!」

もしかしたら嫌がるかもと心配していたけれど、結局それは杞憂だったみたいだ。

丈は目をキラキラさせて『しゅぎょーって初めて! 山ごもりして、強くなったらししょーと戦うんだよね!』とおおはしゃぎしている。

……もしかしたら修行の意味良く分かってないのかも知れない。

と言うか、そうだ。この場合、やっぱり師匠はあのナチなのだろうか。

気が重いけど、それはそれで見返す目標にもなるかも知れない。本当は極力関わりたくないけど。

完全に乗り気なわけではない。

けれど、いつも通りの騒がしくて穏やかなこの『今』が続くと信じられるなら、がんばれる。

机の上に置いた新幹線のチケットは、新しい何かへ続く道の切符でもあるのだろうか。

——それはまだ分からない。

夜の雨は弱まって、きつともうすぐ止むだろう。

新しい夏が来る。

第12楽章：アン・ドウ・トロワで武者修行（3）

どこまでも晴れた夏の朝なのに、お堂の裏にある林は薄暗い影に沈んでいる。

林、と言うより樹海だよねコレ……と思ってしまうのは、多分真っ正面がお寺だからだろう。更にその脇にはこぢんまりとした霊園という、いかにも何かありそうな立地条件だ。

いやな雰囲気倍増なのだが、アホみたいにするさい蝉の声がその全てに勝っていた。

スピーカー並の大音量でミンミンジワジワやられたら、どんな怪しい雰囲気だつて台なしだろう。

いや、この場合それはありがたいんだけど——何しろ、うるさい。本当にうるさい。

「今日もすつごいねーせみ！」

「太陽が昇ったらすぐ鳴き始めるよね。あたしだったら毎日こんな大声出せないな、疲れそう——」

「でもおねえちゃん、前は毎日こうしゃくに叫んでたよね」
「……」

この会話すら、容赦なく続く蝉の声にかき消される寸前なのだ。エドワードの腹立つ目覚まし（と言う名のモーニングラブコール）なんかカワイく感じるぞ、このうるささ。

取り敢えず蝉の鳴き声は考えないようして、石畳に散らばる落ち葉を掃き集めていく。

お堂の裏手だというのにだだっ広いこの道は、林の中にある山道

に続いているのだそうだ。近くにコンビニもない典型的な田舎だけど、この辺りの道は丁寧に舗装されている。おかげで毎朝掃除しやすくて助かっている——のだが。

なんでこの辺がこんなに綺麗なのか、その理由を聞いて驚いた。

なんとココ全部、私有地らしい。

全部だ。お寺もその裏道もお墓がある場所も裏山も、何もかも全部。

なんでも昔ここの地主さんが、地元の方々に大変信仰を集めるこのお寺の参拝客のためにと、私財を使って道から何から全て美しく舗装し直したそうだ。

国の援助に頼ったわけではない。全部、自腹で。正直いくらかかったのかなんて怖くて聞けやしなかった。

でもって。

その“人の出来た地主さん”は子供がいなかったため土地を全てお寺の住職に譲り、安心してこの世を去った。今この土地の所有者はその住職の息子さんで、さらにその方の孫には“大変良く出来た信心深い好青年”がいるからお寺の将来も安泰なのだから。

……孫が誰のなのか、なんて話はするだけ二度手間だろう。

まあ、あの人だよな。

言わずもがな。

「ナチ……あのドケチ眼鏡め。こーんな広い土地に住む金あるならお手伝いさんくらいキチンと雇えっつーの！」

「だからばく達『おてつだいさん』やってるんじゃないの？」

「……そうだったね……」

冷静なツツコミありがとう弟よ。

そう。

あたし達は今、除霊師・那智清隆の実家であるお寺で、彼の言葉通り“夏休みのアルバイト”に勤しんでいるのだ。

ていうかあれだけ散々脅しっぱい事を言っただけで怪しい脅しまで口にしたクセに、ナチの実家で待っていたのは本当の本ツ当にただのバイトだった。

朝はひたすら早く起き、お堂で何やらやってる人達を横目に境内の草むしりと掃き掃除。それが済んだら霊園に行っただけの事を繰り返す。

それが終わって、やっと朝ごはんにありつけるのだ。

初日はこの朝ごはんを食べずに仕事をするのが辛くてたまらなかったのだが、それももう四日目ともなると慣れてしまった。

人間以外とお腹がカラでも動けるらしい。

それに後で気付いたのだが、日が昇ると、山裾とはいえここは意外に暑いのだ。あの暑さの中では掃除も草むしりもかなりの重労働になるだろう。

朝ごはんが最後になるのは一番効率的なのだと分かってからは、もうあたし達はこれ慣れない早起きも当たり前だと思っただけになっていた。

しかし………なんでまた、あたし達はこんなバイトをやっているんだろう？

ナチが言っていた修業なんて未だに話にも出て来ないし、かと言ってあたし達のやってるバイトだって、別に夏休みのヒマな学生なら誰だって出来る程度のものなのだ。

別に、なにもあたしじゃなくてもいいお仕事。なんたって小学生の丈にだって半分こなせるくらいなんだから。

まあ日給は結構いいから文句なんか言わない。と言うか言えないけれど。

この一週間分のバイト代があれば、友達と何回カラオケ行けるかな——なんてリアルな事を考えてみようとしても、どうも思考はこっち側に戻ってきてしまう。

なんだか、この“目的が見えない”感じが気持ち悪い。

ナチはあたしと同じ幽霊を見る感覚を持っていて、あたしよりそれに関わってきた生きてきた除霊師だ。

何を考えてるんだろう、あの人。

何させたいんだろう、あたし達に。

朝のスッキリした頭で考えても、答えの見えない疑問はグルグルと空回りするばかりだ。

今度、ナチに会ったら直接聞いてみようか。

と言うか、そうだ。ここに来た日以来会ってないぞナチ。

……………あれ？

「…………アイツ、もしかして今ここにいないんじゃない——」

「あつヤシロさんだ！ おはよーございますーす！」

独り言にかぶさるように聞こえた丈の声に振り向けば、紺色の作業衣に身を包んだ、見慣れた人がこちらに歩いてくるところだった。

「あ、おはようございます八代さん」

「おはよう、倉田姉弟。今日も元気そうだね。早起きは慣れた？」

「なれましたー！」

「あたしもどうか」

「茉莉ちゃん、最初の日は本当に辛そうだったからね」

「そ、そーでしたね……」

あははと漏らした空笑いに、丈がぶふつと噴き出した。恥ずかしい事だから早く忘れて欲しいんだけどなあ……。

しかし八代さんはカケラも悪意なんかないようで、よかったよかったと眉毛をハの字にして微笑んでいる。これではあたしも笑うしかなかった。

ナチの取って付けたような笑顔じゃなくて、本当に優しい顔で八代さんは笑う。そこそこおじさんなはずなのに、なんて邪気のない顔なんだろう。

笑顔ってこうあるべきだね。

八代さんはここのお手伝いさんで、お坊さんではないらしいのだけど、雰囲気がとても柔らかい。

やっぱり、こんな静かで穏やかな場所で毎日慎ましく暮らしてたら角の取れた人間になるんだろうな。

——と思った途端、ふとナチの爽やか嫌味な笑顔が浮かんだ。

前言撤回。

多分これ個人差あるな。

お寺に着いた日“ナチみたいな怖い奴ばかりだったらどうしよう”なんて不安をキレイさっぱり拭い去れたのは、実はこの人のおかげだったりする。

猫背でガリガリで眼鏡でどこか情けない顔付きのちよつと頼りな

い印象を受ける八代さんだが、話してみると気さくで明るい。何よりここで一番あたし達を気遣ってくれているのは何を隠そうこの人だ。

駅まで迎えに来てくれたのも、バイトの内容を説明してくれたのも八代さん。

——ちなみにナチは迎えにも出て来やがらなかった。

あんにやるー。マジでバイトだけさせる気かも知れない。

「もうすぐ終わり？」

「あ、はい。後はこれ堆肥置き場に持って行くだけなので」

「すぐおわるよ、ぼく置いてくる！」

「じゃあ私も手伝おうかな。霊園の方の掃除も済んでるから、すぐに朝ごはん食べられるよ」

「やった！早くもってこう！」

落ち葉でパンパンになったゴミ袋を両手で抱えて、丈は慌ただしく走り出した。

「ちょっと、落っこさないでよ！また掃除するのイヤだからねっ！」

「わかってるってば、ほらヤシロさんも急いでー！」

「ああ待って、丈くん、足速いなあ……」

困ったように笑いながら八代さんも小走りで丈を追いかけていった。堆肥置き場は裏道を行けばすぐだから、二人とも三分もしない内に戻るだろう。

さてと、あたしも箒を片付けなければ。

置いていかれた竹箒を拾い上げた——その時だ。

生温い風が吹き抜けて、蝉の声がぷつりと途切れた。唐突な静けさが林を覆う。

決して冷たい風ではなかったはずなのに、背中から首筋にザワリと悪寒が走った。

これは——……まさか。

暑さのせいではない汗がじわりと滲む。夏の日差しに照らされているというのに、冷氣に当てられたように肌が粟立った。

生温い風が吹いて来た方に“何か”がいる。確実に、いる。

それが何なのか、確かめるのが恐ろしくて堪らない。ここはお寺のすぐ側で悪いモノなんかいないはずだ。なのに——なのに、これは何？

久しぶりの強烈な悪寒に息がつかまってしまいそうで、思わずゴクリと唾を飲み込んだ。

落ち着け、あたし。

そうだ、ここはお寺の側じゃない。変なモノはいても悪いモノはいないはず——っていや、変なモノも充分怖いわ！

「もう……なんなのよ……っ」

堪らずこぼした呟きに答えるように、低い唸り声が聞こえた。

——唸り声？

「え、野良犬？」

咄嗟に振り返った先、木々の合間に黒くフサフサしたものが見えた。

すぐにそれは木陰に隠れてしまったけれど、明らかにそれは「大

きな黒い犬」の後姿のようで……という事は。

「な、なんだあ、ただの犬か……」

緊張して損した。でもなんでだろう、あたし達が掃除しようが走ろうが鳴き止まなかった蝉が、あんないつせいに鳴き止むなんて。

首を傾げて考えていると、首筋をヒヤリとした何かがすり抜けた。

「ヒツ……！？」

「マリイーツ！！ あんな優男の笑みにほだされてはダメだ！ た
とえあの造作が不細工好みの君に取ってストライクゾーンと真ん中
だとしても、考えてもみたまえ！ マリイ、彼は絶対に四十手前だ
！ おじさんなのだぞ！？ ……ま、まさか君はあそこまで年上の
男が好みなのかい……っ！？」

「ビツクリさせん何かと思つたわーツ！！」

振り返った背後にいたのは、涙ながらにハンカチーフを噛み締め
る逆さまのエドワードだった。

「だ、だって君、あんなに楽しそうにあの男と談笑を……ッ！」

「いや八代さんお手伝い仲間だから——じゃなくて！！ ウロウロ
しちゃだめじゃない、エドワードは幽霊なんだから参拝客を脅かさ
ないようにお屋敷の中から出るなって言われたでしょ！？」

「だ、だって君達が戻るまで暇じゃないか……」

きまり悪そうにゴニョゴニョと語尾を濁して、エドワードは逆さ
ま状態のままフェードアウトしていく。

「おいコラ逃げるな」

「な……なんの話かな？」

「今ちゃっかり消えようとしたでしょうが」

パツと元の薄さに戻ったけれど、エドワードは情けない表情でハンカチーフをいじくり回したまま顔を上げない。

そういえば、また今朝も随分と派手な服装だ。金ぴかの襟飾りが太陽にきらめく事は無いけれど、フリルだのボタンだのがふんだんにあしらわれた礼装は色彩がなくなっただって充分ド派手だ。大体、日本の夏の山でこんなゴテゴテした格好の外国人なんてそうそう見れない。

まあ幽霊なんだけど。

「ほら、もう。一緒に戻る。朝の仕事終わったから今からごはんよ」
「マリイ、君のお誘いなら喜んで一緒にしようとも！」

——相変わらずテンションの振り幅すごいな。

涙に濡れたハンカチーフもどこへやら、鼻唄まじりに空中スキップをかますエドワードは速効でいつもの調子に戻っていた。

扱いやすくていいけど……仮にも元英国紳士がそれでいいのか、エドワード。

また遠慮なく鳴き出した蝉の声に隠れるくらいの小さなため息をあたしは吐いた。

「ねえ、おねえちゃん。結局、ぼく達『しゅぎょう』やらないのかな？」

朝ごはんの後、お昼前に待っているお堂の掃除までが休憩時間だ。

ぼんやりと課題のプリントを開いていたあたしの側でゴロリと畳に寝そべりながら、ふいに丈が呟いた。

「さあ……どうなんだろうね」

こればかりはあたしも何も答えられない。朝、お寺の開門ついでにお坊さんのいるお堂の方をちらりと見に行ったのだけど、ナチの姿はそこになかった。いたのは奴のお祖父さんである住職ひとり。

読経の途中だったから声をかける訳にもいかずそのまま部屋まで戻ってしまったけれど、その途中でも出会ったのは数人の参拝客とお墓参りに来た人達だけだった。

もしかしたらというより、やっぱり、ナチはここにいないのかも知れない。

アルバイトもはや四日目。あと三日もすればあたし達はここからオサラバだ。そうすればもちろん修行なんて出来やしない。

なんだか……これはマジで、ただのバイトなんじゃないかって予感が確信に変わる寸前なんですけど。

「……あたし何のためにここまで来たんだろ……」

「ま、マリイ、そう気を落とさずとも……ホラ！ 噂の霊山はすぐそこじゃあないか！ 帰る前にでも一度登ってみてはどうだい」

エドワードが慌てたように窓の外を指差した。

ナチが話していたという霊山、それはお堂からすぐの山道から登る事が出来る。実際、目の前なのだ。

バイトで一日が過ぎるから今まで見ていただけだったけど、結構そこは登りやすい所らしい。山自体が高くはないし、御本尊がある

のはその中腹なのだと聞いた。

お年寄りでも結構登っているみたいだし、道もかなり楽なのかも。

バイト終了日の仕事は朝の仕事までだと八代さんも言ってたし、それならちよっとお参りして帰る事も可能だろう。

「まあ……そうだね」

何もあたしは修行したくて来た訳じゃないし。でもなんか、釈然としないんだよね……この気持ち。

悶々と考え込んでいると、ふと廊下から声が聞こえた。

「茉莉ちゃん、丈くん、今ちよつといいかな？」

「あ、はい！ どうぞ」

襖を開けると、そこには八代さんが猫背を丸めて立っていた。

「いきなりごめんね、実はちよつと二人にお願いがあつて……大丈夫かな？」

「構わないですよ、宿題もほとんど終わってますから。なんですか？」

実は後ろでエドワードがもの凄い顔をしてこっちを見ていたのだが、あたしはそれをキレイに無視した。

エドワード、八代さん靈感皆無っぱいから、そんなに睨んでも効果ないと思うんだけど。まあそれを今言うのは色々めんど臭いので、後々伝えてあげよう。

「明後日の夏祭りで使う道具類を蔵から出すの、手伝って欲しいんだって。清隆さんが」

「きよ……えつナチが!？」

思わずさん付けするのも忘れてあたしは叫んだ。
ここに居たのかよ!　でも、いつから?

「実は今日帰って来られたんだけどね、遠出して疲れてるから誰かに手伝って貰えると嬉しいって……私が行けたら良かったんだけど、もう今から昼食作らなきゃいけないくて。他に手が空いてる人が今居ないんだよ。お休みしてるところ申し訳ないんだけど、お願い、できないかなあ……?」

本当にごめんねと、ただでさえ丸まった背中をさらに丸めて八代さんは頭を下げた。

あああ……こんな風をお願いしたら断れるワケないじゃない。

さらに後ろで聞いていた丈が、パツと顔を上げて元気よく答えて来た。

「いいよ!　ぼくもう今日の分のプリント終わったから」

「本当に?　ありがとう、助かるよ……!」

ホツと安堵の表情になった八代さんの手前、あたしはちょっと、なんて言葉は霞と消えてしまった。

うつ、がんばれよあたし……!　ナチとはキチンと対峙して、靈感の事とか色々聞いてみようって決めた筈じゃない!

それでもやつぱり、ナチに会うのは少し落ち着かない。

「おねえちゃんも行くよね!　ほら、ふたりで行けばナチさんなんか教えてくれるかもしれないよ!」

振り向けば、丈がにこつと笑ってガッツポーズ。……ありがとう、弟よ。ホント心強い。

吐きかけたため息を嘔み潰して、あたしはクルリと八代さんに振り返った。

「じゃあ、弟もOKみたいなのでふたりで行きますね」

「行く行くー！」

「三人だ、僕の事も忘れないでくれたまえ！」

ふんぞり返ったエドワードがあたしと八代さんの間に立ちふさが
る。珍しく本気でヤキモチ焼いてるらしい。ナチと話しててもこ
うはならなかったのに、どうしてまた。

だが目の前でそんなおかしな事が起こっているだなんて全く気付
きもしない八代さんは、何度もありがとうと頭を下げている。

……八代さん、いいんですよ。そんなに何回も頭下げなくて。

ていうか、あなたが頭下げる度、エドワードの礼服突き抜けてあ
なたの生首が現れるから、ちょっと怖いんです——なんて事はまさ
か言えない。

「じゃあ、すぐ行って貰えるかな？ あ、蔵の場所って知ってたっ
け？」

「あのいつも掃除してる裏道の途中にある建物ですよ。たしか
堆肥置き場のちよつと前にある」

「そうそう！ よかった、じゃあふたりともお願いね。本当にあり
がとう」

もう一度頭を下げ、八代さんは昼食作りに去っていった。猫背
の背中をジト目で睨みつけるエドワードをたしなめつつ、机に並べ

たプリントを片付ける。

よし、気合入れて行かなきゃ。なんせ相手はあのナチだ。

「じゃ、行こうか？ 二人とも」

「うん！」

「当然だとも」

丈とエドワードに声をかけると、二人から歯切れのいい答えが返って来た。

外に出ると、相変わらずの蝉の声があたり達を出迎えた。真上に昇った太陽はさらに眩しさを増している。まさに夏本番といったお天気だ。

Tシャツにクロップドのデニムという涼しい格好なのに、汗が全然止まらない。

むせ返るような青々とした夏の香りが山に立ち込めていて、それがこの猛暑に置いては少しばかりの緩衝材になっていた。

「あ……居た」

お寺の裏に回るとすぐ、白壁の綺麗な蔵の前で待ち構えているナチの姿が目に入った。

うわあ、めっちゃスタンバイしてらっしゃる……。

「あれナチさん？ 着物きてる。なんか『れいのうりよくしゃ』って感じだね」

「そうかな？ 暑苦しいだけだと思うけど」

そもそも、なんでこんなあつつい日にまで着物着てるんだろ、あ

の人。

近付くと足音に気付いたのか、除霊師ナチが微笑を浮かべてこちらに振り向いた。

「やあ、お久しぶりだね。茉莉ちゃんに丈くん、それにクロムウエル卿」

「ほう、その名を覚えているとは。ありがたいね、ナチ」

早くも臨戦態勢に入ってしまったっているエドワードを横目に見つつ、いちおうの挨拶を返す事にした。言いたい事はその後だ。

「お久しぶりです、ナチさん。ていうか今までこちらに居なかったというお話をチャーツとお聞きしたんですが……？」

「はは、僕はなかなか多忙でね。ここを空けている事の方が多いんだよ」

あやまりやしねえ。いや、別に謝罪の言葉を期待してたわけじゃなかったんだけど。

ただ、なんだかここまでアツサリ流されてしまうと、むしろ謝れよメエみたいな気持ちになってくるのはなんでだろう。

そんなあたしの複雑な心境を知ってか知らずか、傍らの丈が目をキラキラさせながら声を上げた。

「こうしゃくの事見えるんですね！　じゃあ、やっぱりナチさんが『ししゅう』になるの？」

「師匠？」

「そう、ししゅう！」

丈の言葉を受けて、ナチは一瞬ほかんとした顔になり——そして

次の瞬間には、いつも以上に爽やかで背後に花でも散ってそうなイケメンスマイルを浮かべていた。

うわあ……なんか、いい予感がしないんですけど。

「そうか、それは嬉しいね。師匠、ではこれから僕の事はそう呼んでもらおうかな」

「!?」

「はい、ししよー!」

バツと手まで挙げて楽しげな文と対照的に、あたしはこの夏一番の衝撃に言葉を失っていた。

し、師匠? コイツの事を、たった今から師匠と呼べと——!?

多分その時のあたしからは、言い知れない負のオーラがガンガンに放たれていただろう。エドワードがちょっと仰け反り気味だったから、きつとそうだ。

「どうしたのかな、茉莉ちゃん」

「……あの、ナチさん」

「師匠」

間髪入れずに訂正された。顔にはこれ以上無いくらいの爽やかな笑み。

……て、てめえこのやろう……ハゲろ、ちくしよっ!!

良く分からない呪いを込めて、あたしは自分の顔面に何とか笑顔を貼り付かせた。

「……師匠」

「よろしい」

屈辱だ。

絶対コイツ、分かってやってるだろ。ナチの顔は生き生きと輝いている。生来のドS気質なんだ、この人。嫌がれば嫌がる程よるこぶであろう事なんて簡単に想像できる。

なるべく早く呼び慣れてしまおう……もしくはもう呼ばない方向で行くしかない。

心の中で齒軋りしつつ、あたしはなんとかイライラする気持ちをなだめた。ビークールだ、あたし。ここでイラついても何も発展なんかないんだから。

ナチは優しい微笑を湛えつつ、背後の蔵へ振り返った。

「まあ修行らしい修行をつけてあげられる訳ではないんだけど……今は取り敢えず、お手伝いをしてもらおうと思ってね。八代から話は聞いているだろう？」

「え……ああ。たしかお祭りで使う道具を出すんですよね？」

「そう。大きな物はそう無いから大丈夫だ。ただ少し、埃がね。エプロンは借りてきてあるから二人とも着けて」

「はあい！」

「……どうも」

なんだ、ホントにお手伝いなんだ。拍子抜けと安堵の混ざったヘンな気持ちになりながら、あたしは受け取ったエプロンを身に着ける。

ついでに丈のエプロンの紐を結んでいると、その横でナチが手馴れたようにかんぬきを外して、蔵の観音開きの扉を開いていた。

「うわあ……！」

「なんと、これは……素晴らしい」

開け放たれたその中をのぞき見て、丈とエドワードが感嘆の声を上げた。

さすがと言えいいのか。お寺の蔵と言っただけあって、中には仏具、装飾品が整然と並べられていた。他にもたくさんの大きな木箱が積まれ、壁際に並べられた棚には書物や巻物が収まっている。奥の方には古い筆筒と、階段が見えた。この蔵って、二階もあるんだ。知らなかった。

「大きいー！　すごい！　映画に出てくるとこみたい！」
「ありがとう。でも、あまり物があり過ぎて管理が大変なんだけどね」

丈の無邪気な言葉に苦笑しつつナチは答えた。

実際そうだろう。これだけの物、綺麗にせずと持って置くなんて大変だ。置きっぱなしじゃカビや虫食いで駄目になるし、かといってこれだけの品物虫干しするのもかなりの重労働になるはずだ。

うつん、家は古いお屋敷とかそんなの関係ない一般家庭だったから考えた事もなかったけど、古いお家を継いでくっついていうのもそれなりに大変な事なのね。

さて、とナチはたすきを掛けながらこちらに向き直る。

「じゃあ運ぶ物を教えよう。ああ、それより先に、クロムウェル卿「む？」

「貴方にも少々お願いしたい事が」

「なんだね」

「一度、ラップ現象をお願い出来ますか？　蔵の中で」

「は？ 構いはしないが……一体何故そんな事を？」

首を傾げつつも、エドワードは素直に蔵に向かってひとつパチンと指を鳴らした。蔵全体に響くようなミシツという怪音。その直後、蔵の奥の方から何か小さな物が二匹飛び出してきて、ちょうど蔵の戸口に立っていたあたしと丈と、あと浮かんでいる筈なのにエドワードはそろって大きな悲鳴を上げた。

「ネズミっ！！？？」

「ありがとうございます、クロムウエル卿」

いやああ足の間すり抜けられた——！
いつ避けたのか、ちゃっかり扉の影に隠れていたナチが顔を出して微笑んだ。

「ちよつ、言つてよ！ 踏んじやつたらどうするの怖かったじゃない！」

「君に踏まれるほどネズミは鈍くはないから平気でしょう」

「あたしがっ！ 平気じゃないの！」

「ぼくもネズミはへいきじゃないです……」

「君は心底ナチだな……なんて奴だ」

もうやだこのいじめっ子。

半泣きの私達を差し置いて、朗らかに笑いながらナチは蔵へと足を踏み入れる。

「でもこれでもう君達を脅かすような物は蔵の中にはないよ。安心して入りなさい」

恐る恐る入って見ると、蔵は薄暗く少し埃臭い臭いがしたが、確

かにもうネズミは襲って来なかった。

もしかして、あれは作業の前に追っ払っておこうって事だったんだろつか。それならあんな嫌がらせみたいな事しなきゃ、素直に感謝も出来るのに。

目の前であからさまなため息を吐いてやろうかとも思ったけど、なんとなくそれは気が引けたから止めておいた。

また妙な嫌がらせなんてされたら堪ったモンじゃない。

「じゃあ、始めようか」

ナチがパンと手を叩いたのを合図に、あたし達は荷物の運び出しを開始した。

夏祭りに使う道具類は、蔵が綺麗だったためかそこそこ楽に運び出す事が出来た。

盆踊りの舞台に設置するという長い紅白幕、大きな和太鼓、その台座、ビニールシート、なんだかよく分からないけど綺麗な布、なんだかよく分からない派手なペアの飾り、なんだかよく分からない鉄の杖みたいな物——その他、ほとんどが「なんだかよく分からない物」のオンパレードだった。

物自体は確かにそんなに重くはなかったが、なにしろジリジリと肌を焼く太陽の下で何度も蔵とお堂を行き来するのだ。かなり骨の折れる作業だった。

全部を運び終わる頃には、あたし達はみんな汗だくになっていた。

「——うん、これで最後だ」
「よ、よかった……」

運び出した物の数を確認してナチが頷いた。その脇であたしと丈は大きなため息を吐く。

お祭りの準備が、まさかこんなに大変だなんて。屋台とかそういう物は業者さんをお願いするらしいけれど、それ以外にこんなに準備しなきゃいけない物があるなんて。

息があがってしまったあたし達とはうらはらに、ナチは汗こそかいているものの至って普通の顔をしている。

慣れてるのか、そんな暑苦しい格好で生活する事に。というか男の人だからかな。やっぱり体力の差はかなりあるんだろう。重たい金物類は、殆んどナチ一人で運んでいたし。

板間に並べた荷物をばんやり眺めていると、ふと隣でエドワードが呟いた。

「その……すまないね。幽霊である僕はこういう時、非常に無力さを感じるよ」

「エドワード？」

少ししよげたように呟くエドワードは、なんだか寂しそうだ。

別にいいのに、そんな事。でも、彼は根っから紳士みたいだから女の子や子供が力仕事をしているのに見えているだけ、と言うのが我慢できないのだろう。

蔵で一度だけ荷物を浮かばせようとして失敗して、ナチに“蔵に永久に閉じ込めておく事も可能ですがどうしましょう？”なんて脅しをかけられてビビっていた。

「別にエドワードに力仕事させたいなんて思っ
てないよ、あたし。いいんじゃない？ エド
ワードはエドワードが出来ることをすれば
いいだけよ」

「……マリイ……！ やはり君は素晴
らしいよ、僕の生ける太陽！ ああその煌
めく一日の終わり、君が安息の眠りへと
落ちる時に、傍らで子守唄を紡ぐ月に僕
はなりたい——」

「それは結構です」

へんな慰め方するんじゃないか。こんな
疲れてる時に齒の浮くセリフを聞かされ
てもつつこめない。

ふと、あたし達に向き直って、ナチが薄
く微笑んだ。

「二人ともお疲れ様。あとはこれを御本
尊のあるお堂まで運ぶんだけど——」

「えっ!？」

「大丈夫だよ、さすがにそれは女の子の
力じゃあ大変だからね。後は大人に任せ
ておきなさい。今日はもういいよ、ご苦
労様」

「はあ……お疲れさまです」

「おつかれさまでした、ししょー」

助かった、さすがに今日はもうへとへ
と過ぎて動けそうにない。

「二人とも汗だくじゃあないか。あのヤ
シロとかいう男に頼んで先に風呂を使わ
せて貰ってはどうかい？ 服も洗わなけ
れば。汚れてしまっているよ」

「そうだね。ああーさすがに焼けちゃ
ったなあ。日焼けすぐに戻るといいけど
……」

そんな話をしつつエプロンを外してい
ると、立ち去りかけていたナチが急にこ
ちらへ戻ってきた。

「な、なんですか」

「忘れるところだったよ。はい」

ずっと差し出された手の平に、綺麗な千代紙の張られた小箱が乗っていた。綺麗だけど、不思議な箱。八角形の小さな箱は、受け取って見ると少し重みがある。握りこぶしより少し小さいくらいの大きさで、見た目はずいぶんかわいらしい。

「これって？」

「なっ、なんだナチ、君はいきなり！ 急にプレゼントだなんて卑怯な手を……！」

いやそれ違うんじゃないか。

つつこむ体力が無かったのでそうは言わなかったけど、結局ナチがすつきりと訂正してくれた。

「違いますよ。それに女性に贈り物をするなら、もっと相手を選びますね僕は」

「……入らない事までご丁寧にどうもっ！ で、これなんですか」

「そうだね——まあ言わば、これが『修行』かな」

「へっ？」

ぽかんとして見詰めるあたしを無視して、今度は丈に向き直る。

「丈くんにはこれ。腕を出して」

「えー？ はい！」

「……よし」

丈の右の手首に細い紐を巻き付けて結ぶと、ナチはにこりと不穩

な笑い方をした。

「君の修行はこれ。……丈くんは『紐を腕からほどいて外す事』、茉莉ちゃんは『箱の中身を出す事』だ」

「え……？ ああ、ちよつと」

「修行、がんばって」

につこりと笑って、それじゃあね、とナチは踵を返す。

修行？——なにが？　これが？

遠ざかる後姿を呆然と見詰めていると、急に隣から悲鳴が聞こえた。

「うわっ！？　なにこれ、ほどけない……え！？」

パニック気味に丈は腕の紐を引っ張っている。引っ張ってどうするの結びがきつくなるでしょ、と言おうとしたあたしに、バツと腕を差し出して丈は叫んだ。

「結び目なくなった！！」

「そんな事……ウソっ！？」

なんで！？　結び目がない！

紐は確かにさっきナチが結んだ物の筈なのに、いつのまにか何の結び目も無い、輪ゴムのようになっている。意味が全く分からない。どういう事なの、これ、手品？

驚きに目を見開いていると、丈は唐突に目を輝かせてあたしの手を握り締めた。

「すごいよ、おねえちゃん！　ぼくコレがんばるね！」

そしてテンション高めに繋いだ手をブンブンと振り回すと、キヤーとかワアーとか言いながら丈は走っていつてしまった。

「……一体何なんだい、これは？」

「あたしも……わけわかんない」

取り残されたふたりの声が、むなしく蝉の声にかき消されていく。そうして師匠^{ナチ}の世にも奇妙な修行が始まったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3955b/>

幽霊紳士狂想曲

2011年6月21日06時56分発行